俗諦極
樂問答

天の羽衣

特258
954
42
65

始

特258
954

受け難き人身を受け、遭ひ難き佛法に遭ひながら、人の一生といふものが、何の事か分らず、心の置き所、身の持様に幾百の疑問を持つ筆者は、是まで道の人とさへ見れば、何分の教を乞ふを常として參りました。

恥し乍ら此年になるまで、聊も安心らしいものが現前せず、少しも腹といふものが据はりません。

天分もなければ、努力もないものは、致し方のないものです。

愚か、筆者にはさつぱり見當が付きません。

併し何となく親み易いので、近づいて見ますと、非常に温く、つい身の上の相談でもしたくなります。すると叮嚀に親切に、面倒な話にでもしつかりと乘つて下さります。

處が不思議な事には、一旦、話が神佛とか、第一義とかの問題に及ぶと、卒然として態度が一變し、冷かなること堅氷の如く、嶮しきこと斷崖の如く、全く近付くことが出來ません。強いて向つて行けば、直ぐにこちらの持棒でくらはされます。愚圖々々して居れば、劍もホロ、に突放されます。こちらの物は皆取り上げられ、あちらからは點滴も施されません。殘念ですが、只今の筆者には何ともなりません。

退いて色々と考へて見まするが、隱士の腹の内は手前共には全然、不可解です。その冷酷に少からず不快の念が起りは致しますが、自分とは段違ひの樣な氣が致しまして、畏敬の念をも禁ずることが出來ません。

そこで、ふと思ひ付き、隱士との商量の度毎に、その詳細を逐一記錄して置くことに致しました。暫くの間に、それが夥しく累積いたしました。この粗末な一篇は此度、その累積の一部を整理し、且つ、少しく潤色いたしたものでムります。

素より未熟者の囈言を取扱つたもの故、何の價値もないこと勿論でありますが、一應、かくの如く取り纒めまして、一には以て筆者自身の座右に置き、將來、再三再四、繰り返さるべき心の動轉に備へ、一には以て筆者と病を同じふせらるゝ大方の君子の机下に薦めて、慮外ながら御一讀を願ひ度い念願で御座ります。

幸に、御緣あつて、此一本を御買上げ下された君子にして、本書中、御氣付きの點がムりましたらば、御面倒樣ながら、何かと御教示下さいませ。御叱正でも、御批判でも、將又、御感想でも、筆者は謹んで拜受し、衷心より感謝いたします。

昭和十一年十二月十一日

著者識

俗諦極樂問答

天の羽衣

井尻　進

（一）

井尻　不思議なこともあるものだなア。

九條武子夫人　……。

井尻　極樂から出ておいでになりましたのでムいませうか。

夫人　私が極樂にお參りしてゐるといふことがお解りなの？。

井尻　……。もちろん解りませんが、大衆は武子樣は寂光の都の極樂にお參りになつたやうに申してゐます。しかし實際はどうなのでムいます？。往生の本懷をお遂げになつてゐるのとは違ひますでせうか。

夫人　サア、そこですよ。往生の本懷と簡單にいひはしますがネ……。

井尻　それぢやア、極樂ではなしにどつか外のところにおいでゞムいますか。

夫人　それが貴君方にお話してもなか〳〵解らないのですよ。娑婆のあなたには眞實の言葉を聞く耳がないでせう……。でも極樂往生を疑ひなさいと言つてるのぢやないのよ。

井尻　さようでムいますか。

夫人　昔から「往き易くして人無し」と云はれてゐるでせう。今になつて見ると「なるほど」と合點がいつてよ。

井尻　フム！……。

――沈默――

○

井尻　有難うムいます。極樂とはどんなところか私等のやうな者には解らないのでムいませうネ。

夫人　そうよ。それがまた口で言ひ盡せるやうだつたら世話はないのですが……。莊嚴妙土の極樂はお釋迦さまの無碍辯でゞも貴君方に分かるやうに言へないのでせう？。

井尻　なる程ネ……。時に只今、親鸞聖人はどうしてムるのでせう。やはり極樂にゐられますので御座いませうか。

夫人　貴君の耳が小理窟を聞くやうに出來てゐる耳でせう。極樂の妙土といふだけあつて、世間でわかるやうな小乘的な因果の理では話があはないのですよ。そんな事をいま急にいつたつて耳には這入らないわネ。兎も角、御開山はどこにゐらつしやるか、貴君が御信心を得て活眼が開けてからでなくちや解らないの。

井尻　その活眼はいつ開きますでしようか。

夫人　其活眼が開けた時がお淨土よ。大體、貴君は今ものが見へると思つてるでせう。だから爲物の世界にゐらつしやるのです。自然、實相は見へないでせう。

井尻　何のことか分かりかねますなア。一體、どういふ修行をすれば、その活眼が開けますのですか。

夫人　貴君が、いくら自力の修練を積んで見ても、それは駄目よ。「得た」「開けた」といふのは正法ではなくつて、外道ですから。

井尻　ぢやア、いくらお念佛をくりかへしても駄目でムいませうか。

夫人　そこが貴君方には話が困る點なのよ。眞實でない貴君がお念佛の中に消えてしまつた時が金剛の眞心を得て活眼が開けた時、と一應言つて置きませう。そうすると御開山さまがどこにゐらつしやるかも見當がつきますでせうネ。

井尻　たゞ見當がつくゞらゐでムいませうか。

夫人　マア、そんなことでせう。「今までの事は何もかも皆ウソだつた」といふことに自分自身が氣づかぬ事には、なんぼ御信心の大乘のといつたところで、どうにも仕樣がありません。貴君方は始終口癖のやうに大乘々々と言つてらつしやるけれど、大抵は先づ口尖の大乘ネ。ですから大乘を損なつた破大乘よ。

井尻　大變ですネ。

夫人　大變ですとも。それに私なんか婆婆にゐた時には、一廉わかつたつもりになつて人さまの前でお說法なんかをしてお馬鹿さんでしたわ。本當のことが解らないからこそお說法も出來たのです。よくも眉毛や髮の毛が拔けなかつた事と思つてよ。

井尻　迂濶にお說法も出來ませんネ。

夫人　その段になると御開山さまも苦い體驗がおありだそうですよ。お智惠が實相に入つて、お喋りがウソであることや、文字が假のものであることを知つてゐらつしたから、すぐ廢しておしまひになりはしたものゝ、隨分馬鹿なことをしたとお氣づきになつたとのことです。

『是非知らず邪正もわかぬ此身なり、小慈小悲もなけれども、名利に人師を好むなり』と仰せになつてますものネ。

井尻　現今、眞宗の宗學者の人々が大衆に對して公然と如來や名號の說明をしてゐるやうですが、あんな說法は差支ないものでムいませうか。

夫人　どんな說法？。

井尻　なんでも吾々凡夫が經典を讀んで、「經典は佛の說かれたものであるから眞實であるが、自分の發言するところは嘘である」と大いに恐縮をする。そして恐縮だけではなしに佛の御名を唱へる。ところが佛の御名を行ずると言ふのは之を信心といふ。御名と信心とが徹底して極度にまで高まると、涅槃の證りを得るのだといふ意味のことでございます。

夫人　それは、その人々が頭の尖で勉强して辻褄の合つたやうなことにコヂつけてらつしやるのでせう。腹に覺えのある事ではありますまい。苟も冷暖自知の人には、ソンな、甘つチョロイ事は云つて居られない筈……。

○

井尻　大薩遮尼乾子經に「如來の力が加はつてゐる者は信ずるが、それを除いた者が信ずるといふことは決してない」と出てゐるやうですが、ぢやあ、本當の信心といふものは一種の還相廻向と見ていかゞでムいませうか。

夫人　相變らず貴君は文句が多いのネ。

井尻　若しさうだとすると、無上涅槃は極位だとか極果だとかいつても、それで定まつてしまつてゐるものではないやうに存じますが、如何でムいませう。

夫人　定まつて了つてゐるとも、何とも御開山は仰になつてゐないぢやありませんの？。そんな夢想的な事を詮鑿し出すと果しがなくて、いくら壽命があつても足りないから、「マア念佛を」と云た按配で、お經の體のお名號を先に唱へられたのでせう？。

井尻　そうでムいますか。體を先にして用を後にしられたところは痛快に思ひます。

夫人　いくらでも痛快がるのは御勝手として、貴君のやうに信心を口にする人が未だ惡い事をするのは、一體どうした事？。貴君方のいふ信心はほんの口尖のものでせう？。

本當の御信心を頂いたものには、モウ悪いことなんか出來やしないのぢやなくつて？。御自身の心の欲する通りにやつておいでになつて、そのまゝが法にも道にもチヤント適つてゐらつしやるのが、御信心の方々でせう？。違います？。

井尻　やはり安養のお淨土にお參りさせてもらつてからでないと、信心を頂いてゐるんだなんて大きな顏は出來ないのでムいませうネ。

夫人　それにどうも貴君方のは救濟の名に甘へ過ぎてゐらつしやるやうに思へてよ。「藥があるから毒を呑むでもいゝ」と大ざつぱな事を考へていらつしやるのぢやありません？。「救濟があるから罪惡はかまはない」といつたけぶらひが多分に見へてよ。

井尻　はい、その邊になると、近頃の私の如きは實に怪しいものでムいます。一體、眞宗人は「煩惱即菩提」だからといつて、不行儀を平氣でやりかねない傾向がありますが、それは御信心が頂けてゐない證據でムいませうネ。

夫人　さあ、その「煩惱即菩提」を觀念的に扱つて頭尖でわかると破大乘に陷るのでせう。不行儀や不義理を平氣でやれるのは、煩惱即菩提ぢやなくて煩惱即煩惱なのでせう。煩惱即煩惱の剛の者は道義などにヒコ〳〵しないから肚もあるやうに見え、威勢もよく見えて、立身出世するのには一時都合がいゝかも知れませんがネ―。

井尻　聖道自力のやうにも聞ゑますが、世間の道德はあくまでも無視出來ませんのでムいませうか。

夫人　「無視してはいけない」といふより、御信心の人には無視することが自然に出來なくなるのでせう。しかし、その時の「道德」といふ言葉の定義を一應吟味する必要がありません？。

井尻　個人が正義とするところを正義としないで、佛さまが正義となされるところを正義としなくちやならないでせう？。

夫人　では佛さまが正義とせられる正義とはどんなものなの？。

井尻　……。

夫人　それが解りさへすれば世話はありませんのですがネ。そこのところが到底、會解講釋で行けないから、兎も角も、お念佛をしないで居られなくなるのぢやない？。

井尻　……若し念々に御信心が徹底させてありましたら、いついかなる場面に遭遇してもうろたへるやうな事はありませんでせうネ。

夫人　それは、その筈です。貴君のやうに理論だけでものを考へてゐるのでは、いくら理窟は合つてゐても、いざといふ場合に臨んでは屁の突張りにもならないでせう？。假りにどんなに頭腦が明晰でも、絶對の問題の前には何の役にも立ちますまい。その絶對といふ言葉が早や變ですけどネ。

井尻　そう仰つしやれば私のやうな者は、「さて」といふ場面に臨むとオビ〳〵して困ります。本當の親切の場合には心を鬼にせねばならんといふのに、鬼になるどころか、づる〳〵と先方に引摺られてしまふのです。だからとても大魔王になるだけの勇氣なんかはムいません。

夫人　そうでせう。平素にギリ〳〵結着のところまで突きつめて置かないと、纖細な良心の持主では神經衰弱に陷つてしまつて、まさかの時の役には立たないでせう。大魔王にでも平氣でなれるのは、佛さまの正義となさるところを正義とし得る、その確信の頂けてゐるものばかりが出來る藝でせう。その越すに超せない二河白道を越し得てゐないものが魔王のまねでもしやうものなら、それこそ恐ろしい結果を見ねばならないわネ。

井尻　……。

夫人　ところがですよ。平素どうしても肝腎の御信心の問題を等閑にして、ボンヤリしてゐない迄もヅル〳〵と世間に引ずられてゐるのが人間といつてもいゝぐらゐだから變ネ。たまさか、それを問題にする人があつても、觀念上の遊戯に扱つてしまつてゐるんですからグスイのです。そう言へば私自身だつてそうよ。娑婆にゐる間は、別に廻避してゐたつもりではないのですけど、甘く取扱つてしまつてネ、「惱み」だとか「打

込む」だとか自分の頭尖で思つて見たり、文章に書いて見たりしてネ……、今となつては恥を殘して行つたにしか過ぎないやうなものヨ。本當に！。

井尻　どうも痛み入ります。それでは吾々日々をどんなに生活して行くべきなのでムいませう？。

夫人　……。

井尻　……。やはりお念佛の生活も、先づ眞實の聲に耳を澄ましもつてゆく一種の修練でムいませうか。御恩奉謝の生活といふことを聞くには聞いて居りますが……。

夫人　それを修練といふならば、あなたさまの御計らひに生活がなりきる迄は一種の修練であるかも知れませんがネ。さあ、それも貴君の言葉なら謝恩といふのは勿論、修練といつても眞實の言葉ではありますまい。

『親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信ずるほかに別に仔細なきなり。念佛は、まことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。』

と御開山も仰しやつてるんですからネ。しかし念佛まかせや、師匠まかせの大乘の生活は、立身出世の道と必ずしも平行してゐませんのよ。之は貴君よく御存じネ。

井尻　大體心得てゐるつもりでムいます。兎も角も、一切合切佛さまに乘托して行くより他に手はありません。

夫人　あなたまかせの生活には大將がいゝの、大臣がいゝのといふ論理はないのですから、世間のエラブツにはなれないかも知れないわよ。いゝ加減、良心を麻痺させて置かないで立身出世するなんかは、餘程の才能に惠まれた人にでも望むべくして行はれない相談でせうからネ。第一、本當の良心の持主なんか矢面に立つた、そんな地位に自分から進めないのぢやありません？。

井尻　それぢや、立身出世して高い地位には昇進しないにしても、私のやうな素質に惠

まれない者が日々の仕事をして行くのにはどうすべきなのでせう。大きな意味の極樂に參るとか參らぬとかの大安心ではなくて、日々の私の今日事はどうすべきなので御座いませう？。

夫人　アーラ、まだそんな事をいつてらつしやるの？。一切合切佛さまに乘托してゆくといふものが何事です。いかな困難な場合でも、御信心の人は自分が正しいと信ずることを、地切り場切りの手一杯でやつて通るより仕様がないことになりは致しません？。

井尻　……

――沈　默――

（二）

井尻　夢の世だといはれる浮世の凡夫が、一切を佛様に乘托して、自分が之で正しいと信ずるところをやつていゝものでムいませうか。それぢやア、餘り物騷なことはありますまいか。

九條夫人　そう？……。「之は惡いんだ」と思ふことを平氣でやる事も物騷と違ひます？。大體が、貴君の程度では、どうすればいゝと言へるんぢやなくつて、「今のところこうするよりしやうがない」と言へる程度が關の山ぢやありません？。貴君の仰つしやる「浮世」とこの世を見る見方は貴君になら自然でせうネ。先づ「劫業に流轉してゞまるところを知らない」と見る見方は丁度、貴君に身分相應といつたところでせう。之が「一物でも定まつて動かないものがある」といつた見方をすると無常の娑婆ぢやア話が不自然極まるでせう。その點、貴君の仰しやることも解らないことはないのよ。

井尻　やつぱり浮世は假の世だ、と見る見方は不自然ぢやないのでムいますネ。

夫人　あなたには不自然ぢやムいますまい。そこに何か例外を持ち出す方が不自然かも知れませんわよ。つまり金剛不壞の佛さまの世界にならいざ知らず、あなたぐらゐの世間に不變だの不滅だのといつたものは有り得ないんぢやなくつて？。

井尻　そうですか。絶對にでムいませうか。

夫人　……。若しあるとしたら娑婆ぢやムいますまい。貴君は法華經の如來壽量品でお聽きだつたでせう？。

井尻　聽きましたとも……。だから如來の淨邦の極樂なら、流轉を知らない一定不變の安住地を得られるわけでムいますネ。

夫人　そこがお話が娑婆とはちがつて居る點なんですよ。いくら娑婆の賢い頭で憶測を逞ふして見たつて、それは駄目よ。憶度の見解といつてネ、一向に通用しないんですの。娑婆の人がお聞きになると、いかにも動かないものかなにかのやうに受けとれても、そこはお氣の毒ながら一向に通じないの……。第一、如來さまには一定不變の常相もなければ、敗壞不安の變相もないんですから、變でせう。

井尻　フム……。

夫人　それから先は申上げますまい。貴君なんかには躓きになるといけないですから。

井尻　……。そう仰しやれば仰しやるほど、餘計にうかゞひたいやうな氣がいたしますが……。

夫人　危いけどネ……。極樂には、實は佛さまはゐらつしやるとは言へないのよ。

井尻　エッ！藻拔けの殼ですか。

夫人　藻拔けの殼だなんて直ぐ仰つしやるでせう。だからウツカリしたことが言へないの。「佛さまがゐらつしやるとは言へない」と言ふ私も良くありませんが、「佛さまがゐらつしやる」と言ふのも良くはありませんわよ。貴君は『能斷金剛般若』をお讀みでしたわネ。

井尻　はい。昭和八年の四月の一日から三日まで、神戸の商工會議所でありました、光壽會講演の時に、光瑞猊下からお聞かせに預つてゐます。

夫人　その時に、「大體住する所がないから無諍住といふのである。自分が無諍住を得たと考へるのは、自分を認めるのだから無諍住ではない」といつたことが說かれてありませんか？。

井尻　さあ、あつたかも存じませんが、どの邊にムいましたか、一向に覺えて居りません。その後も度々讀ませてもらつてはゐますが無論、論語よみの論語しらずでムいますから……。

○

夫人　マア、そんなに困らなくつたつていゝでせう。兎も角も、極樂には佛さまがゐらつしやらない、と言つた大それたことをいふのも無茶な話でせうが、そこに佛さまがゐらつしやる、と知つたやうなことを娑婆の凡夫が放言することも、佛さまの思召にかなつたものではない筈……。

井尻　矢張りコトアゲする事はゆるされないのでムいませうか。

夫人　さうネ。……。コトアゲしないだけでは立枯れてしまふでせう。御開山の如きは「かうすればいゝ」とか「あゝ言へばいゝ」とかいふところを超越して、一切がつさい押へどころがなくなつて、然もシヤントしてらしたやうですから、「コトアゲしないのがいゝんだ」といふコトアゲなんかなさらなかつたでせう。

井尻　フム！、兩方ともを肯定し、兩方ともを否定されて見ると、たちまち私の如きは居所に窮してしまひますが……。

夫人　サア、そこですよ。大きな聲を張りあげて、「これが彌陀招喚の勅命だ」と言つてると、モウ外道におちいつてゐるでせうし、「これが敗壞生死の流轉だ」とやつてると正法にはづれてゐるんでせうネ。

井尻　……。

夫人　婆婆にも、極樂にも居どころがなくなると、どうするお積り……。眼を白黒させて駈けずり廻つてゐなくちや仕方がないのぢやなくつて？。

井尻　……兎も角も尻のおろしどころがなくなるから、かけずり三昧でも望まねばしやうがありません。

夫人　三昧を望めば、もう三昧にはなりますまい。あなたには覺えがありません？。

井尻　けれども、佛道では念佛三昧だとか、坐禪三昧だとか、いろ〳〵いふぢやムいませんか。三昧を得たらどうなるんでムいませう？。

夫人　三昧を得たらどうなるといふ事は解らない筈よ。三昧だから……。賢そうな人は三昧を得てからの話をしてらつしやるやうですが、果して如何なものでせう？。三昧を得てからの事は別として、佛さまがあると言つても外道だし、ないと思つても外道といふことが、正直末法に受け取れる人であるなら、もう極樂に追込まれずにゐられないのとは異つて？。

井尻　弱つたことになりましたナ。極樂といふ佛さまの世界がないやうな事もいはれるし、あるやうな事も言はれるし、お話が神出鬼沒で、私のやうな者にはなんともかとも言へなくなるぢやムいませんか。

夫人　さあ。神出鬼沒だなんて與太が飛ばせれるだけ言へてるんぢやなくつて？。婆婆といつた相對世界に棲んでる浮世の民のあなたの言葉は全部ウソと思はない？。あなたが、どんなに日本一の大文豪だと謳はれてなにをお書きにならうと、いかに世界一の雄辯家だと囃されてなにを仰つしやらうと、佛の眼からはまことの言葉ではありますまい？。

井尻　どんな小說家の作品をもつてしても、又どんな藝術家の藝術をもつてしてもでムいませうか。

夫人　それは存じません。しかし佛さまの無碍辯才でならいざ知らず、文章でなら書きあらはせられる、口でなら言ひ表はせられる、音樂でなら表現出來うるといつたもの

ではありますまい。

井尻　ぢやア、やはり身口意の三業でやることは、皆まことがないから無駄事といふことに終るのでムいませうか。

夫人　終るともいへますまい……。また終らぬともいへますまい……。三業はそのまゝ三密ですからネ。貴君は毎度、胸をつき出したり、大聲を張り上げたりなさるやうネ。肝腎なところに覺えがないからでせう。あれが若し覺えがあつたら、しやうつたつて出來つこのない藝當とちがつて？。ウソであればこそ、まことしやかに大きな顏もしてやれるんぢやない？。でも身口意の三業と云つてるものゝ、それがまた、極樂に出さへすれば、なにを言つても、そのまゝが結構至極な誠實言の御法義よ。

井尻　ぢやア、笑つても泣いてもでムいませうか。

夫人　えゝエ。佛さまの眷屬になつた者なら、泣こうが笑はうがクツシヤミをしやうが、すつかり誠實言なの。變？。

井尻　變でムいますとも。

夫人　貴君の耳には順じますまいネ。

井尻　順じませんどころか、大衆にはチツトモまともに響きませんでムいませう。……。

夫人　あなたは大衆なんかいゝ加減なものと思はない？。

——沈默——

井尻　……。何事に依らず、大衆の耳に順じるやうにすることはいゝ加減なものでムいませうか。この點、私の商賣上重大問題ですが……。

夫人　なんとか自分の喰物にしやうと思へばこそ、大衆の御機嫌もうかゞはなくちやならないでせう。いかゞです。大衆の皆があゝ言ふから、こう思ふからもグウダラな話とちがつて？。

井尻　だとすると、十指のゆびざすところ、十目の認むるところと言つた事も、出鱈目な說でムいませうか。

夫人　そうよ。從つて婆婆でいつてる輿論なんかいつたものも、その實、曖昧なものよ。

井尻　そう伺へば……私の仕事はなんだか、わけが解らなくなつたやうでムいます…。

――沈默――

井尻　しかし、それぢやサツパリ押えどころがありません。御正意がはつきり立たないやうな氣がいたしますが、如何でせう？。

夫人　貴君のおつしやる御正意ツてなんの事？。

井尻　一口に言へば彌陀廻向の御信心といふことなどです。「如來が廻向したまへり」と言はれる、その如來廻向の信心でムいます。これを、そのまゝそのやうに頂いてはいけないのでせうか。これも矢張りウソでせうか。

夫人　頂いていけない、とは誰も言つてやしないわよ。だけどネ、貴君が「之が如來廻向の信心だ」なんてことが言へて？。それが言へるんだつたら、「總じてもて存知せざるなり」とおつしやつた御開山の流れを汲む淨土眞宗とは合はないやうな氣がしてよ。

たとひ、それが淨土眞宗だなんて銘がうたれてあつても、怪しいとお思ひでない？。

井尻　それぢや看板と中味とがちがふと仰つしやるんでムいませうか。今日淨土眞宗の御法義は大抵こうですが……。

夫人　貴君、それぢやどう思つて？。淨土眞宗なるものが宗教的にあると思つて？、なにと思つて？。御開山のやうな淸淨な念佛者に「無い」とか「有る」とか、そいつた硬化したものが存立し得られるでせうか。そこがお尋ねして見たいのよ。貴君の尊敬してらつしやる親鸞は、自分で「之がたしかな法の城だ」といつた封建的なものを築いてゐらつしたでせうか。どう？。なにかで圍つたりつゝかひしたりしなくつてはやつて行けなかつたでせうか。

井尻　一體、何の事ですかネー。

夫人　まして、「この宗旨はいゝから大いに弘めなくちやいけないんだ」なんて、そんな宣傳の大旆は押し立てゝゐらつしたやうに思へないですが、貴君には如何？

井尻　それぢやア、上に立つて「かうせよ」と人を導く、指導原理がはつきりしないやうに思へますが、どんなものでムいませう。

夫人　先に立つて「隨いて來い」だとか、上に立つて「かうしろ」だとは少しも言はないで只管、念佛合掌せられた御開山のお姿が有難くてならない氣がしられてよ。貴君にはいかゞ？。

井尻　そんな事ぢや人が率ゐられないぢやムいませんか。もつと積極的に出ないと大乘ぢやなくて、小乘に陷る恐れはムいますまいか。

夫人　だつて、貴君方は自身で「國防のためだ」――「護國のためだ」――とは言つても「國を攻めるためだ」――「國を擊つためだ」――とは言つてらつしやらないぢやないの？。婦人の方々だつてそうでせう。國防婦人會とはいつても「國攻婦人會だ」等とはいつてらつしやらないやうに思ひますが、本當はいかゞ？。やはり內心は積極なの？。

井尻　それぢや武子様は眞面目な人は人を指導しない、と仰つしやるんでムいませうか。

夫人　マア良心のたしかな人なら、人を指導するんだなんて事は思へないでせうネ。まして箭面に立つて、大きな聲で人を攻擊するなんか言ふことも苦しいでせうと思へてよ。

井尻　……。

――沈默がつゞく――

○

井尻　そうおつしやれば、現に今やつてる選擧だつて差しづめ困まります。「英雄出でよ」だとか、「偉人いでよ」だとか言つても、本もの、人材なら出れない事になりませう。「乃公出でずんば、この蒼生をいかにせん」といふ御見識で、出馬してる人も少くありますまいが、併し自分から打つて出て名乘をあげるやうでは、明に本もの人材ではありますまい。その點、私も今の選擧は少々變だと思ふのでムいます。第一、人前で

大きな聲を張り上げて自分の主義主張をほめなくちやならないワガエ選擧であり、桶屋議員なんですから、大概なら小まし、な人は最初から出やう道理がありませんネ。たしかに、あれなんか西洋のまねをし過ぎてると思ひます。

夫人　そうですネ。本ものが出るか出ないかは、なか〳〵貴君に一々しらべがつきませんでせうが、大衆なるものが感心したり尊敬したりするものも、存外、曖昧なものと言ふことはいひ得るかも知れませんわネ。

井尻　それにしても、わが日本帝國臣民の常識として、兎もかくも、領土だけは積極的にひろめなくちやならないものと思ひますが……。

夫人　……。

井尻　やはり擴げる必要がある時には擴げなくちやいけないんでせう？。

夫人　ぢやアお尋ねしますが、第一、領土を擴げて見てなにをなさるの？。

井尻　國家を隆昌にします。

夫人　國家を隆昌にして、その次はなにをなさるお積り？。

井尻　そりやア、今日死線に陷つてゐる蒼生の生活を安定させます。

夫人　生活の安定をさせて見て、その次はなにをなさる……？。

井尻　生活が安定さへすれば、教育を大いに振興させます。

夫人　教育を大いに振興させて、その次は……？。

井尻　……。教育が大いに振興したら、大悟させることも出來て、極樂にも導き入れることも出來やうと思ひます。

夫人　大悟徹底して極樂に入つて見て、その次は……？。

井尻　……。娑婆世界を寂光淨土にし得るのとちがふでせうか。

夫人　娑婆世界を寂光淨土にして、次は……？。

井尻　つまり惟神の大道が現前いたしますがなア。

夫人　惟神の大道を現前させて、その次は……？。

井尻　……。

夫人　そして、その惟神の大道とは……？。

井尻　……。……。……未だそれは研究して居りません。

夫人　解らないのに、なぜ領土を擴めなくちや……などおつしやるの？。第一、その惟神の研究を消極的に後廻しにして、領土の擴張を積極的に先になさるといふ理由は……？。

井尻　……。

夫人　どうです？

井尻　……。

夫人　どうです？。

（三）

井尻　……。あまり追ひつめられると、ものが言へなくなります。一體が、私は攻撃力が弱くて、人樣にへごまされ易い男でムいます。しかし、なんぼへごまされても、この國家第一主義の考方に、毛頭間違ひはないと思ひますが……。

九條　夫人　……。

井尻　惟神の大道の體得を先にしなくちやならない事は、私だつて、まんざら氣づかない事はないのでムいます。日本といふ國が、惟神の大道をもつて世界に君臨しなくちやならないといふことは、火を見るよりあきらかな問題です。これだけは誰がなんといつても動きますまい。

夫人　解つて見たり、わからなくなつて見たり、くる〳〵廻轉の激しい先生だことネ。

井尻　……。惟神の大道を世界にしくことも無理でムいませうか。

夫人　凡夫が、「かくある」の現狀に對し「かくあらねばならん」と、意識してしくカンナ

ガラの大道が、はたしてカンナガラでせうか。

井尻　この問題も、やはり鼬鼠ごつこになりそうですね。

夫人　鼬鼠ごつこツてなんのこと？。

井尻　つまり、……話がくる〳〵同じやうなところに……。でも武子様の御話の具合ぢやア、現當二世のうちの當の方は、兎もかくとして、現の方が渡れないやうな氣がします。

夫人　どんなに渡れないの？。

井尻　武子さまのおつしやるやうなお話だと、とてもぢやないが婆婆五十年が送れそうにムいません。果てしのないことを無闇に掘り下げて考へ込んでは、すぐに神經衰弱をやつてしまつて、さつぱり立ちゆかないでせう。そんなむつかしい問題は、唯佛與佛にまかせておいて、浮世の俗事はおほよそのところで、いい事はいいにしてはどんなものです。

夫人　ぢやア、どうすると仰つしやるの？。帝國主義を楯にして、カンナガラで押してゆくお積りなの？。

井尻　そうでムいますとも、私等には嚴然たる帝國主義、皇室中心の國民道德の上に、燦然たる現世利益、王法爲本の他力宗教がうち立てられるのです。後生の救濟は阿彌陀さまが中心でございます。現世の利益は、どうしても皇室が中心です。第一、王法がたしかに行はれてゐないところには、たとへ如何なる正法でも行へつこはないではありませんか。

夫人　なんですつて？。

井尻　……。ぢやア、伺ひますが……、武子さまは、一君萬民の我國家を否定してらつしやるのでせうか……。謹んで承りませう。

夫人　畏くも「之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず」と仰せられる我皇室に、帝國主義といつたやうな伸びのわるい主義がおありだ、とあなたに思へて？。

「天地の公道人倫常經なり」と仰せられる大御心を、おほよそのところで、いい事はいに遊ばすぐらゐに忖度なさるお積り？。

井尻　どう致しまして……大御心を忖度するなどゝいつた、畏多いことは私には出來ません。

夫人　「出來ません」といふ、その口で、それをなさるから畏おほいぢやないの？。カンナガラの御訓が、そんなに硬化したものと、あなたには思へるのネ——。

井尻……。硬化などと仰つしやるところを見ると、法城にたてこもつてゐる本願寺も武子さまは多分、否定なさるのでせうネ。元來が、本願寺あつての武子さまだつたのですけれど……。

夫人　私がいつ本願寺を否定しましたの？。

井尻　……。積極的には否定してゐられなくとも、消極的には否定してゐられるんでせう。私等の聞き馴れた忠君愛國の思想とも、他力信心の御教義とも、御話の勝手が大分ちがひます。近頃あちらでどうかなさつたのですか？。

夫人　あなたは失禮ながら、御聖教が讀みやぶれてゐないのでせう。たゞ文字のうわつ面をよんで、覺えてらつしやるのと違つて？。

井尻　どうしてゞせうか。『諸有衆生其名號を聞きて、信心歡喜し、乃至一念せんに、至心に回向したまへり』と教へられたら、正直に如來の廻向したまふ名號をうけとつて、信順するのが、彌陀廻向の信心でムいます。これに狂ひがあつたり、迷ひがあつては自力の信心で、淨土眞宗ではありますまい。

夫人　御開山の借りてゐらつしやる「語」にとらはれてしまつて、肝腎の「意」の方に通じてゐないのとちがつて？。

井尻　ぢやア、どうせよと仰つしやるのです。他力の信心とちがつてもいゝと言はれるのでムいませうか。なにか確な代るべきものがない限り、やたらに思想や安心をたゝきこわすことは、人を危險にみちびくものだと思ひます。やはり教へは教への通りに

ゆかないと、詭激思想、異安心になるやうなことはムいませんでせうか。天子様の御護りを受け、佛さまの御助けにあづかつて、私といふものは救はれるのです。決して自分の力で自由になるのではない筈でムいます。兩方ともを否定したり、兩方ともを肯定したりすると、論戰の上では強いかも知れませんが、野狐禪かなにかになつて、空々寂々ぐらゐが落ちでせう。

夫人　あなたは帝國主義だとか、淨土眞宗だとか、何とかかとかの殼にたてこもつてゐないと不安なのネ。自分で「之がいゝんだ」ときめてかゝつて、それを手離すことが、心配でたまらないのネ。

井尻　如來廻向の信心には不安も心配もありません。私等には脫却や解脫は不必要です。武子さまは「自分が之で正しいと信ずるところをやるよりほかに、しやうがないではないか」と、いふ意味のことを仰つしやつたやうでしたが、私のはそんなものではありません。武子さまのは念佛で申せば、欲生願求の念佛たるを免れません。自己の不純な考へが混つてゐると思ひます。往生の一大事は、どこ〳〵までも、彌陀廻向の御信心におすがりして、徹頭徹尾まかせきるにあると思ひます。

夫人　あなたには欲生願求のお念佛と、勅命信順のお念佛とが、全く二つに見えませうネ。兩方そのまゝ、「あなたさまの御計らひ」と受込むわけには參りますまいネ。三業惑亂は御承知？。

井尻　これはけしからん。武子さまは、自力も他力も御計らひになさるのですか。それでは凡夫も佛も無いのですネ。驚いた！。それで淨土眞宗ですか。

——夫人は答へず、たゞ冥目合掌して、口のうちで靜に、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛——

○

井尻　……。

——稍々思ひ直ほした樣で——

井尻　それでは一寸伺ひますが……。「あなたさまの御計らひ」と仰つしやいますが、何

でもかでもあなたさま任せにしさへすればいゝ、と仰しやるのでムいますか。それが御他力といふものですか。

夫人　……。なんでもかでも皆あなたさまの御計らひだ、とゆくと、人の物を盗んでも御計らひ、人に物を盗まれても御計らひ、蹴りあひ、咬みあひ、殺しあひが、みんな御計らひといふ事になりますよ。人間世界は直に獣の世界になるかも知れませんネ。

井尻　……。どうも武子さまのお話はわけが分らん……。それとも今日は私がどうかして居るのか知らん。

夫人　うまいところへ出て來ましたネ。

井尻　何がうまいです……。兎もかくも、人間は餘り突飛な事には頭を突込まずに、やはり因果の理にしたがつて、着々たしかな足どりで歩かせて貰つた方がよくはないですか。

夫人　あなたが他力々々と仰つしやるのは、それは自力に對する他力ですよ。もと〳〵因果々々でゆかうとする相對的の考へなんでせう。頭の中で何程整理をつけやうとしても、あなたの分際では、矢張りどこかに狂ひが出て來ませう？。

井尻　フム……。因果の理にくるひがありますか。因果の大理に狂ひがあつては大變ですがな……。

夫人　この世も人間、あの世も人間、といつた具合に、いつ〳〵までも人間は人間と行くといふのが佛道なの？。

井尻　そうは行きませんよ。因果の理法がありますから。しかし、私の如きは死ぬると同時に極樂に入りますから、大丈夫でムいます。

夫人　あなたは確に極樂にお參りなさるの？。大丈夫……？。

井尻　これだけは誰がなんといつても大丈夫でムいます。引受けてが絶對の力をもつた如來ですから、狂ひつこはムいません。外のものが引受けたのでは信用はいたしませんが、相手が佛でムいますから……。

夫人　確なお話なのネ。然し御自身でいくら、そう想ひ定めてらしても、さて、こいふ場合には皆ケシ飛んでしまつて、何の役にも立たぬことは無くつて？。念のために一寸伺つて置きますが、絶對眞如の世界で相對因果の理法が確に通用いたします？。

井尻　……。

○

井尻　「念佛を一度でも唱へたものは、極樂に往生させずに置かない」と、教へられるのではなかつたのでムいませうか。それぢやア、あの法藏菩薩が彌陀如來になられた願がつぶれるぢやムいませんか。私、一匹ぐらゐのものが救へないやうなことでは、無碍光の、無上正徧知のとはいへないぢやムいませんか。

夫人　……。

井尻　なに一つとして望みの叶はない婆婆であればこそ、今度の往生によつて、極樂に參つてから、普賢行をやらせてもらふ事にしてゐるのです。「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておはしますとこそおほせはさふらひしか」と、おつしやつた親鸞聖人や、「世間虛假、唯佛是眞」と、のたまふた聖德太子のおほせを眞に受けてはどんなものです。

夫人　あなたは極樂に生れてからの御用務までがはつきりしてらつしやるの？。「地獄に落つる業にてやはんべるらん」といふ念佛をしておきながら……。

井尻　でも御經にそう書いてあるぢやムいませんか。御經のことまで否定されちやア、話もなにも出來なくなります。

夫人　御經に書いてある通り、あなたはなさるの……？。

井尻　……。まあそうです。極樂に參つて、一切の力を得てから、佛の力によつて自分の眷屬も救へば、國家社會の問題も解決します。婆婆に現在ゐながら自分の自力でやるより、佛力でやる方が樂です。

夫人　あなたは娑婆々々とおつしやるが、釋尊の御跡は御履みにならないの？。釋尊は娑婆で御活動なされたのとは違つて？。

井尻　あれは例外です。佛ですから……。

夫人　佛に例外があります？。あなたの知識ぐらゐのものでもつて、不可思議の佛さまの世界のおきてを、勝手に私議することがゆるされて？。

井尻　佛世尊のことを私議するつもりはありません。釋尊は應身佛であつて、娑婆に相はあつても如來ですから、吾々のやうな凡夫並にはゆきません。

夫人　ぢやアお尋ねいたしますが、お釋迦さまはお死くなりにならなかつたの？。

井尻　死くなられません。涅槃に入られたゞけでムいます。

夫人　涅槃つてなアに？。

井尻　凡夫ではなか〳〵解りません。

夫人　解らないのに、どうして涅槃に入られたなどゝ仰つしやるの？。

井尻　――大いに懊惱しつゝ――しかし、そう一々いはれると、何もいへなくなるぢやムいませんか。人の心に安定をあたへないでは危險だと思ひます。

夫人　釋尊にしたつて、その安心の止めどころがなければこそ、王位をお捨てになつたのでせう？。

井尻　捨てないだつて安心が得られますがな――。聖德太子は、御位をすてないでおやりになつたでは厶いませんか。流石は日本は大乘國だと感心してゐるのでムいます。

夫人　聖德太子がすてないで安心をお得になつた、といふ事が貴君にはお解りなの？。

井尻　ぢやア、どうして釋迦世尊が位をすてゝ佛になられた、といふ事が武子さまにお解りでムいませうか。大體、釋尊は最初から佛なのぢやムいませんか。

夫人　御自分が解らないからと言つて、他人まで道連にしなくつてもいゝでせう？。あゝなたの仰つしやることが間違つてゐるとは申しませんよ。しかし、少しも御自分のものになつて居ませんわネ。借り物を集めてつぎはぎしてらつしやるのと違ひます？。

井尻　……。

○

井尻　どうも私は攻撃力が弱くて困ります。武子さまは鷺を烏にでも、なんとでも言ひまげておしまひになりますが、私は、心の中で解つてゐることも、さて口に出して、となると、モウ思ふやうに行かないだけのことでムいます。

夫人　やはり心ではお解りになつてるのネ。

井尻　……。いや解らないといふ、そのことが解つてるのでムいますよ。

夫人　解らないといふことがお解りといふ、ソノ御解りはどうなの？。

井尻　うるさい事になりますネ。私は攻撃力が弱くてだめです。「攻撃は最良の防禦だ」といふが、本當に先に攻勢に出てしまはないと、馬鹿を見ます。

夫人　「大阪名物まけるが勝ちだ」といはない？。第一、あなたは攻撃といふことが、本當にお解り？。

井尻　――微苦笑しながら――さア、まアた出られた。しかし攻撃は攻撃でせう。從つて防禦は防禦です。「國防婦人會で、國攻婦人會でない」と、先刻おつしやつたぢやありませんか。積極的に攻勢をとらないで、消極的に防戰につとめるのが防禦です…。

夫人　ぢやア、お尋ねしますが、あなたに純粹の攻撃だとか、純粹の防禦だとかいつたものがあるとお思ひ？。

井尻　お尋ねをうけるとヒイヤリと致します。

夫人　與太で、生死の問題が超せるとお思ひなの？。

井尻　――居ずまひを正しつゝ――こんな問題は眼にかどを立てもつてするものではありません。やはり笑顔をつくりもつて、柔くいはないと駄目です……。

夫人　攻撃の問題はいかゞなりまして？。

井尻　私にでムいますか。攻撃なら攻撃で純粹でせう？。

夫人　あなたにそれがお有り？。

井尻　私には有る積りですが……。ソレとも現象界の沙汰に純粋はあり得ませんでせうかな……。

夫人　たしか、何處かで「以攻爲守」といふ額を見ましたッケ。

井尻　では、やはり攻撃も防禦もあることはあるのでムいますネ。しかし、以攻爲守は攻守を純粋に分離の仕様がないですネ。

夫人　まあ、オッチラと氣を落ちつけて考へて御覽……。多分に攻撃を盛られたものを人々は攻撃といふんでせう。實のところは、あなたも其手でしやう？。

井尻　純粋の攻撃があるならある、ないならないと、はつきり言つて頂かないで、あまり奥歯にものがはさかつたやうな言ひぶりをせられると、うろ〳〵いたします。なんだか男か女か、わけが解らないやうな話に落ちそうですがな……。

夫人　――微笑みながら――。あなたは人間に純粋の男があり、純粋の女があると思つてらつしやるのでせうネ。

井尻　……。女性も男性もあいまいだと仰つしやるのでムいませうか。武子さま！實に激しいですネ。いくらなんだつて、男性と女性とが徹底しないんだつたら、世の中はそれこそ暗闇になりますでせう。

夫人　明るい世の中つて、どんな世の中…？。大體、極樂には女性があるとお思ひ？。

井尻　ございません。彌陀の四十八願のうちの卅五願に、ちやんと書いてあります。しかし、娑婆には現に女性があります。こればかりは、いくら五濁惡世でも不明徹だと大變なことになります。

夫人　大變なことになると仰つしやるあなたゞつて、果して徹底的の男やら……。世の中には夫婦の中に男の子ばかり生れるのと、女の子ばかり生れるのとあるでせう？。夫婦が純粋の男女なら、話が合はなくはない？。

井尻　なぜですか。

夫人　男女にそれ〴〵反對の性分の亂がないと、こうは行きますまい。落ち着いて御考

えなさい。

井尻　明徴を欽きますネ。

夫人　あなた明徴の方がいゝの？。

井尻　何ですつて……？。いま現に、國體だつて明徴を期して、大變な騒ぎやムいませんか。この非常時に、明徴がいゝの悪いのと人前でおつしやらうものなら、物騒至極ですよ。

（四）

井尻　國體明徴の徹底を期するといふことは、現下の日本では、最早や常識ですよ。武子さまが娑婆に居られた頃とは、全く、時勢がちがつてますよ。今は明徴がよいのわるいのと云ふ時代ではありませんよ。

九條夫人　……。――にこ〳〵してゐる――

井尻　今までに各種の人々によつて執られた國體明徴の手段や態度を、私は無條件に肯定するものではムいません。しかし、國體明徴だけは斷じて捨て置かれません。「天皇機關説」の浸潤は隨分、根深いものがあります。少し法律でもやつた者だつたら、表面は兎も角、内心では「機關説」を當り前と心得てゐるのが大部分でしよう。最近、二・二六の大事件もあつた事ですから、機關説を公々然と振りまわす人はムいますまい。これが却つて問題の解決を一層困難に致します。此際なんとか徹底的に處理して置く必要があらうと思ひます。

夫人　どう處理なさるお積り？。

井尻　吾々、文士としては、文章報國の精神を皷舞し、我國の上下がはやく國體の眞面目に目覺めてくれるやうに、第一には當局を嚴しく督勵し、第二には輿論の指導に粉骨碎身せねばならぬと考へます。

夫人　機關銃の打方はいつ御研究？。

井尻　どうして、そんなものが要りますか。

夫人　どうしてつて、若しも當局がぐづゝいてゐやうものなら、機關銃でも持ち出さねば埒があきますまい。

井尻　文士は文筆が唯一の武器ですよ。精鋭な文筆を縱横無盡に揮つて突貫致します。機關銃の世話になんかなりません。

夫人　失禮ながら、あなたの御名文を、どなたが何人程お讀みになります？。マア落ち着いて御考へなさい。「國體明徵、盡忠報國」といふイデオロギーがきまつて、それを勢よく推進すると、廿六日から廿八日迄の、たつた三日間にクルリと輪廻して、それ自體が、大變な「國體蹂躙、勅命反抗」になつてしまつたぢやムいませんか。

井尻　……。

夫人　三界の輪廻、娑婆の虚假が、まだ信ぜられません？。

井尻　……。

夫人　どうです？。

井尻　……。

夫人　どうです？。

○

井尻　やつぱり、之も鼬鼠ごつこか……。――嚙んで吐き出すやうに――一體、武子さまには、人に反對せんがために反對してらつしやる傾向が多分にうかゞへますが、私に逆らはんがために、あれこれと仰つしやつてるんではないでせうか。どうも以前と

は、大分、御樣子が變つて居られるやうですが。

夫人　主義を前に立てゝものを仰つしやると、どうしても、自家憧着になりますよ。私はあなたの首吊りの御手傳を勤めたゞけの事よ。

井尻　理窟があるのがいけないんだ、と仰つしやるんでせう？。

夫人　理窟があるのがいけないんだ、と排擊する、其理窟を御信心の人が持てます？。

井尻　――呟くやうに――まるで野狐禪の問答のやうで、少しも面白くありません。そんな抽象的な戲論より、現在、脚下の實際問題として、吾人はいかにすれば、日々吾人の身邊を脅かす生活苦の重壓から、脫却し得るやを、具體的に決定する方が遙に急務ですよ。

夫人　それで？。

井尻　先づ生活苦の重壓から脫却し、次に自他平等に人生を享樂しますがナ。之が淨土眞宗の目標とするところとは違つたでせうか。

夫人　自他の苦惱を除こうとしなさるのは、取りもなほさず、菩薩行よ。全く見上げたものよ。……して其御手段は？。

井尻　世相かくの如く、資本主義が行きづまつてゐる今日、ナチスやファッショのやうに、一種の統制でもつて、產業でも經濟でも革新して行くのが、世界の動向です。

夫人　高い程度の道德律から見れば、資本主義はおかしいですネ。

井尻　そこで無駄な競爭や對立をはぶいて、產業や經濟の統制をとり、大量生產下に、國民の幸福を增す必要がありませう？。安心も信心も、その上の事ですよ。

夫人　幸福とは？。

井尻　そうら來た。

夫人　幸福とは？。

井尻　幸福とは、各自の欲求を飽滿することですよ。それ位のことはお分りでしようがナ。

夫人　各自の欲求の統制は、どなたが御取りになります？。

井尻　欲求を統制された日には御互、不自由な事になりますがナ。欲求の統制は則禁欲主義でせう？。禁欲主義は大乘ではありません。

夫人　産業經濟は統制主義、欲求は不統制主義、お芽出度いことネ。

井尻　なにが御目出度いです？。

夫人　タツタ今、幸福とは欲求の飽滿、と仰つしやつたでせう？。欲求を自由にして置いて、飽滿が出來ます？。たとへ出來ても永續が出來ます？。

井尻　ソコの處は……。

夫人　そこの處をどうなさる？。

井尻　そこの處は大乘的に……。

夫人　大乘的にどうなさる？。

井尻　……。

夫人　御自分の持前の吟味を怠つて置いて、寰境ばかりの改造に沒頭しても、確實な幸福は現前いたしますまい？。

井尻　……。

夫人　どう？。

井尻　……。

夫人　首吊りの名人ネ。

（五）

井尻　私が首吊の名人ですかネエ……。――頭を傾げながら考へ込む――自分の持前の吟味といふのは、自分の道德律を高めるといふ事でムいませうか。

九條　夫人　……。

井尻　道德律を高める方を先にしないことには、統制經濟は行はれないといふ意味でムいませうか。

夫人　……。

井尻　そこの處を、もう少し委しく伺ひたいのですが。

夫人　一體、自分とは何ですか。

井尻　ソーラ、又來たゾ！。

夫人　サツ、眞劍に！。自分とは？。

井尻　自分とは、此自分ですよ。

夫人　此自分とは？。

井尻　此處で、こういふ風に武子さまに對して話をして居る、此自分のことですよ。

夫人　此自分と指されて居らつしやる御方と、此自分と指して居らつしやる御方と、どちらが本當の御自分？。

井尻　本當も嘘もありません。自分は一人ですよ。

夫人　一人で同時に指したり、指されたり出來ます？。主人と客とを同時に兼務して居らつしやるの？。

井尻　主人と客とが同時に勤まる譯はないではムりませんか。無茶を仰つしやつちや困ります。

夫人　ところで、それを平氣で御やりになるのではありません？。

井尻　それは一體、誰の事です。

夫人　あなたが、現に實行して居らつしやるのが御分りになりません？。自分とは此自

分だと仰つしやるのは、確かな主客兼務と違つて？。

井尻　人を餘り阿呆になさらぬ方がよくはないですか。コチラは本氣ですよ。

夫人　首吊が本氣で御好き？。

井尻　何ですつて？。

夫人　首吊りがおいやなら、先づ、その二人藝からやめる事ですネ。

井尻　何だ、馬鹿々々しい。

夫人　あなたは平生、胃が悪い胃が悪るいと云ひながら、隨分、食辛棒ネ。二人藝と違つて？。

井尻　……。

夫人　始終、忙がしい〳〵とこぼしながら、隨分、朝寢坊ネ。二人藝と違つて？。

井尻　……。

夫人　二六時中、氣の咎めるやうなことは全くなさらずに御暮し？。

井尻　それと、この問題と、何の關係があります？。

夫人　首吊は二人藝から起ります。二人藝は「自己」の吟味の疎畧から起ります。

井尻　？？？？？？。

夫人　まだ御承知が出來ません？。

井尻　ソンなら、自己の吟味ッて、どうするんですか。

夫人　あなたの御見込みは？。

井尻　西洋哲學、認識論とでも行きますかナ。

夫人　ソレは御勝手ですがネ。西洋流に自己を以て、自己を究明しようと掛つても、譬へ究明し得たところで、究明し得た自己が又究明を要求しますよ。

井尻　イカにもネエ……。――暫く沈默續く――

○

井尻　誠に色々失禮なことを申上げました。どう考へて見ても、私は救はれつこありませ

ん。

夫人　御氣がつきまして？。

井尻　此、私は、一體どうしたものでしよう。地獄にでも落ちたやうな氣が致します。

夫人　――穩かに、而も肅然と、――御開山も「地獄ハ一定スミカゾカシ」と仰せにな

つてゐません？。

井尻　ナナ、、、ナル程。

――沈默長く續く――

○

井尻　オヤツ！。……それは又なんでムいますか。

夫人　御覽の通りのものよ。

井尻　御名號のやうにも見へますし、天の羽衣のやうにも見へますし、……。なんだか

燦いやうなものでムいますネ。そして、武子さま御自身も……。

夫人　これは自己の煩惱熾盛惡業深重を正直に御認めなされた御方に授かる天の賜なの

……。御念佛と申しましてネ。これにつかまつてさへ居れは、必ず救はれますの。

井尻　ヤア、ソレは……、私にも頂けるんでせうか。若し頂戴できるものなら、是非と

も一つ……。

夫人　勿論、戴けますとも。併し申上げて置きます。今までのやうに、理詰を言つても

思つても駄目ですよ。此羽衣にしつかり御つかまりなさいましたら、必らずいい處へ

御連れします。それは隨分高い處よ。念の爲に、も一度申し上げます。ソレこそ一心

一向にお念佛なさるのですよ。理詰が大の禁物です……。つかまります？。先方へ行

きつく迄は御窮屈でも、必ず念佛の外、聲を出してはなりませんのですヨ。これを御

承知でないと、いくらつかまつても駄目ですよ。

井尻　ハイ〳〵承知しました。つかまりますとも〳〵。併し、ヒヨツト念佛以外の聲を

出したら、どう致しませう？。

夫人　若し出したら、直ぐに落ちてよ。

井尻　落ちても大したことはムいませんでせうか。

夫人　……。

井尻　どうしたものか知ら。……。しかし、今となつて後へ引返すことは、猛獸毒蛇の世界に踏込むやうな氣がして、身慄ひがつきます。世間の無常虛假を想ふだけでも、暈がして、氣持がわるくなります。

夫人　ぢやア、私の言ふ通りに從ひますネ。

井尻　從はないわけにはまいりません。

夫人　では、これにさばつてもよろしい。その代り少しでも疑ぐつたら墮ちますよ。

井尻　南無阿彌陀佛……。——羽衣にとりつくと同時に、稱名念佛が自分の心の中に湧いてゐる。そして、

「これ〳〵、是なる哉」

と心の中で會心の笑を洩してゐる。

「これに信順しないで、何に信順しやう」

といつた思ひがする。しかし、何故か、そんな事を思ふてゐる間は、自分の體がへんに安定を失ふやうな感に襲はれる。それも、その筈である。自分の身がいつしか地を離れて、上騰を始めてゐるのである。

「オ、、この愉悅……」

と思ふと、また動搖を覺える。しかし、不思議なことには百鬼横行の人間界も、かう上から見おろすと、たいした不淨汚穢ではない。今まで見た三保の松原は遙下方に、鏡のやうな清見潟の一灣を抱いて、實に鮮かな眺めである。行手には靈峰富士が泰然として立つてゐる。その莊嚴端麗な姿は、何ともかとも言つて見やうがない。最早、餘程昇つたらしいが、流石に三國一の富士だけあつて、その頂は、まだ上空に屹然として聳えてゐる。

「南無阿彌陀佛……」

自分の羽衣の音はプロペラの唸のやうでもあるが、御稱名のやうでもある。

夫人「大丈夫ネ……。」

井尻「大丈夫でムります。」

と念佛で答へてゐる。すると不二の絶頂は次第に近づき始める。心は念佛に澄み切つてゐる。

夫人「今に不二を超えるから專念に……。」

の聲が心の耳に傳はる。

井尻「それにしても、家族の者たちは、今頃どうしてゐるか知ら。私がどこへ行つてしまつたかと氣遣つてゐるではなからうか。いつもなら皆ンナ揃つて晩御飯の卓を圍む時ではあるが……。」

この念が頭を翳める。

夫人「駄目々々。だから私がダメを押したぢやないの?。」

と鋭く心の受話器に傳はる頃には、井尻の身は下向を始めてゐる。

井尻「南無阿彌陀佛……。」

驚いて心に取消しを誓ひ、羽衣の音にいよ〳〵心の耳を澄ませる。すると再び身は上昇を始める。

夫人「今、不二を超えますよ!」

このトタン、光明の世界は卒然として漆桶の暗黑と變り、思はず知らず稱名を忘れて

井尻「アッ」

と一聲するや、井尻は雲の中から海上へ眞逆さまに墜落……。」

○

佛典を讀みながら、いつとはなしに机に凭れ、肘を枕に淨らかな夢路を辿つてゐた井尻は、肘のはづれたのに打ち驚き、惜しい假寢の夢から覺める。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛

（昭和十一・五・二一――親鸞聖人降誕會ノ日）

所依の文言

極　樂　（一）

○彼の佛如來は、來つて來る所無く、去つて去る所無し。生無く、滅無く、過、現、未來に非ず。但願に酬ひ、生を度するを以て、現に西方に在します。閻浮提(Jambudvîpa)を去る百千俱胝(koṭi)那由他(niyuta)の佛刹(kṣetra)に世界有り、名けて極樂(Sukhāvatī)と曰ふ。佛は無量壽と名く。成佛已來今に於て十劫(kalpa)なり。〔大無量壽經――法賢譯〕

○極樂世界は昏闇有ること無く、亦火光無し。涌泉陂湖、彼に皆有るに非ず。亦住著家室林苑の名、及び表示の像、幼童色類無し。亦日月晝夜の像無し。一切處に於て樣式既に無く、亦名號だも無し。唯、如來威を加ふる所の者を除く。〔大無量壽經〕

易往無人

○謹んで往相の廻向を按ずるに大信あり。大信心はすなはちこれ長生不死の神方、忻淨厭穢の妙術、選擇廻向の直心、利他深廣の信樂、金剛不壞の眞心、易往無人の淨信、心光攝護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷徑、證大涅槃の眞因、極速圓融の白道、眞如一實の信海なり。〔敎行信證〕

○四十八願、淨土を莊嚴す、華池寶樹、往き易くして人なし、火車相現ずれども、能く改悔すれ

ば、尙ほ復往生す、況んや吾が戒慧薫修せるをや。〔天台宗開祖智者大師終焉ノ讃〕

○報の淨土の往生は、をほからずとぞあらはせる、化土にうまるゝ衆生をば、すくなからずとをしへたり。〔高僧和讃〕

不可說

○行通ふ船に都のこと問ははいふにいはれぬおもひなりけり。〔古歌〕

○彼の諸菩薩は是の如きの無量の功德を成就せり。我但汝の爲に略して之を說くのみ。若し廣く說かば、百千萬劫にも窮盡すること能はじ。〔大無量壽經〕

○安樂國土の莊嚴は、釋迦無碍のみことにて、とくともつきじとのべたまふ、無稱佛を歸命せよ〔淨土和讃〕

○大慧復言く「世尊よ、云何に又言語是れ第一義となさんや。言語によりて得らるゝ所說を第一義となさんや。」世尊言く、「大慧よ言語は第一義に非ず。言語によりて得らるゝ所說も第一義に非ず。其故は云何。謂く、第一義聖樂の言語に入るが故に第一義なる言語は第一義に非ず。然れども大慧よ、第一義は聖智自證の境にして、言說分別所知の境に非ず。故に分別は第一義を顯示せしめず。大慧よ、言語は起滅動搖展轉して因緣生なり。而して大慧よ、展轉して因緣生なるものは第一義を顯示すること能はず。自他相無きを以てなり。大慧よ、言語は相あり。第一義を顯示せしむることは能はず。」〔入楞伽經〕

○法尙捨つべし、何に況や非法をや……世尊よ、何をか是法とし何をか非法とする。〔入楞伽經〕

○無爲を以て而して法身を標つることは法身は色に非ず、非色に非ざることを明す也。非に非ざれば豈非の能く是なるに非ざらん乎。蓋し非なき之を是と曰ふ也。自づから是にして復是に非ざることを待つことなき也。是に非ず非に非ず、百非の喩へざる所なり。〔往生論註〕

○何をもつての故に、大德舍利弗。一切相を見ざれば、如來を見ると名づく。執着の見にあらざれば、如來を見ると名づく。物を見ざるが故に、如來を見ると名づく。實の如く見るが故に、如來を見ると名づく。實際非際を見るが故に、如來を見ると名づく。眼を厭ひ色を厭ふが故に、如來を見ると名づく。耳を見ず聲を聞かざるが故に、如來を見ると名づく。鼻を見ず香を嗅がざるが故に如來を見ると名づく。舌を見ず味を知らざるが故に、如來を見ると名づく。身を見ず觸を見ざるが故に、如來を見ると名づく。意法を見ず意法を分別せざるが故に、如來を見ると名づく。

相にあらざるが故に、如來を見ると名づく。非相にあらざるが故に、如來を見ると名づく。

我は如來は世間の攝するところと見ず、亦如來は出世間の攝と見ず。

何をもつての故に。法界中依るなし。法界中不可得に依る。法界中無依また不可得。何をもつての故に。二を見ざるを以ての故に。舍利弗言はく、薩遮大德。汝は今六道によらずして去來するや。答へて言く、大德舍利弗。我れ若し彼の六道の相を見ば、まさに去來あり。われ若し生あらば、また應に生を受くべし。退くあらば應に退くべし。去るあらば應に去るべし。大德舍利弗。一切の法は動かず、轉ぜず、去らず、退かず、生ぜざるなり。

答へて言く、大德舍利弗。如來が六道の衆生に着するによつて、かくの如きの說をなす。彼を拔かんと欲するがために六道に依止す。是の故に如來はかくの如き說をなす。大德舍利弗。佛法中に於ては去らず、來らず、退かず、生ぜざるなり。

舍利弗言く、善男子。われは說くを欲せず。われは說を聞かんと欲す。

一切言語名字によるを遠離す。〔大薩遮尼乾子所說經〕

○菩提は靑にあらず、黃にあらず、赤にあらず、白にあらざるなり。紅にあらず、黑にあらず、頗梨色にあらざるなり。色なく、形なく、相なく、表なく、一切の相を過ぐ。依るなく一切の物を離る。相なく一切の相を離る。言ふべからず。說くべからず。見るべからず。和合知すべからず、別異知すべからず。闇にあらず、明にあらず。形なく、相なく、觀るべきなし。言語にあらず、言語を離る。觸るべからず、知るべからず、聞くべからず、音聲にあらず、口道にあらず。擁なく、礙なく、縛なく、脫なし。瞋にあらず、癡にあらず、一切の事を以て示現すべからず、說くべからざるなり。〔大薩遮尼乾子所說經〕

○爾の時、世尊、維摩詰に問ふ。汝如來を見んと欲す、何等を以て如來を觀んとするや。維摩詰の言く、自ら身の實相を觀ずる如く、佛を觀ることも亦然り。我れ如來を觀るに前際來らず、後際去らず、今則ち住せず、色を觀ぜず、色の如を觀ぜず。色の性を觀ぜず。受・想・行・識を觀ぜず、識の如を觀ぜず、識の性を觀ぜず、四大より起るに非ず、虛空に同じ。六入積むこと無し。眼・耳・鼻・舌・身・心已に過て三界に在らず。三垢已に離れて三脫門に順ず。三明と無明と等し。一相ならず異相ならず、自相ならず他相ならず、無相に非ず取相に非ず、此岸ならず彼岸ならず、中流ならずして而も衆生を化す。寂滅を觀じて亦永滅せず。此ならず彼ならず、此を以てせず彼を以てせず、智を以て知るべからず、識を以て識るべからず。晦も無く明も無く名も無く相も無し、强も無く弱も無し、淨に非ず穢に非ず、方に在らず方を離れず、有爲に非ず無爲に非ず、示すこと無く、說くことも無し。施さず慳ならず、戒せず犯せず、忍ばず恚らず、進まず怠らず、定らず亂れず、智ならず愚ならず、誠ならず欺かず、來らず去らず、出でず入らず、一切の言語道斷せり。〔維摩經〕

○大信海を按ずれば、貴賤緇素を簡ばず、男女老少を謂はず、造罪の多少を問はず、修行久近を論ぜず、行に非らず、善に非ず、頓に非らず、漸に非らず、定に非らず、散に非らず、正觀に非らず、邪觀に非らず、有念に非らず、無念に非らず、尋常に非らず、臨終に非らず、多念に非らず、一念に非らず。唯是不可思議、不可稱、不可說の信樂なり。喩へば阿伽陀（agasti）藥の能く一切の毒を滅するが如し。如來の誓願の藥は能く智愚の毒を滅するなり。〔教行信證〕

信心決定の時

○御たづね候ことは、彌陀他力の廻向の誓願にあひたてまつりて、眞實の信心をたまはりて、よろこぶ心のさだまるとき、攝取してすてられまいらせざるゆへに、金剛心になるときを、正定聚のくらゐに住すとまふす。彌勒菩薩とおなじくらゐになるともとかれて候めり。彌勒とひとつくらゐになるゆへに、信心まことなる人をば佛とひとしとまふす。また諸佛の、眞實信心をえてよろこぶをばまことによろこびて、われとひとしきものなりと、とかせたまひて候なり。大經には、釋尊のみことばに、見敬得大慶、則我善親友とよろこばせたまひ候へば、信心をえたる人は、諸佛とひとしとときかれて候めり。また彌勒をばすでに佛にならせたまはんことあるべきにならせたまひて候へばとて、彌勒佛とまふすなり。しかればすでに他力の信をえたるひとをも、佛とひとしとまふすべ

しとみえたり。御うたがひあるべからず候。御同行の臨終を期してとおほせられ候らんは、ちからおよばぬことなり。信心まことにならせたまひて候人は、誓願の利益にて候うへに、攝取してすてずと候へば、來迎臨終を期せさせたまふべからずとこそ、おぼえ候へ。いまだ信心さだまらぬ人は臨終をも期し、來迎をもまたせたまふべし。この御文主の御名は、隨信房とおほせられ候はゞめでたくさふらふべし。この御ふみかきやうめでたく候。御同行のおほせられやうは、こゝろえず候。それをばちからおよばず候。あなかしこ〳〵。〔末燈鈔〕

○乃至十念とまふすは、如來のちかひの名號をとなへむことをすゝめたまふに、返數のさだまりなきほどをあらはし、時節をさだめざることを、衆生にしらせむとおぼしめして、乃至のみことを十念のみなにそへてちかひたまへるなり。如來の御ちかひたまはりぬるには、尋常の時節をとりて、臨終の稱念をまつべからず。たゞ如來の至心信樂をふかくたのむべし。この眞實信心をえむとき、攝取不捨の心光にいりぬれば、正定聚のくらゐにさだまるとみえたり。〔尊號眞像銘文〕

○御ふみ、くはしくうけたまはり候ぬ。さては御法門の御不審に、一念發起信心のとき、無碍の心光に攝護せられまいらせ候ゆへに、つねに淨土の業因決定すとおほせられ候。これめでたく候。かくめでたくはおほせ候へども、これみなわたくしの御はからひになりぬとおぼえ候。たゞ不思議と信ぜ

させたまひ候ぬるうへは、わづらはしきはからひあるべからず候。〔末燈鈔〕

○一。體失不體失の往生の事。聖人親鸞のたまはく、先師聖人源空の御とき、はかりなき法文諍論のことありき。善信は念佛往生の機は、體失せずして往生をとぐといふ。小坂の善惠房證空は、體失してこそ往生はとぐれと云々。この相論なり。こゝに同朋のなかに、勝劣を分別せんがために、あまた大師聖人源空の御前に參じて、まふされていはく、善信御房と善惠御房と、法文諍論のことはんべりとてかみくだんのおもむきを、一々にのべまふさるゝところに、大師聖人源空のおほせにのたまはく、善信房の體失せずして、往生すとたてらるゝ條は、やがてさぞと御證判あり。善惠房の體失してこそ、往生はとぐれとたてらるゝもまた、やがてさぞとおほせあり。これによりて、兩方の是非わきまへがたきあひだ、そのむねを衆中より、かさねてたづねまふすところに、おほせにのたまはく、善惠房の體失して往生するよしのぶるは、諸行往生の機なればなり。善信房の體失せずして往生するよしまふさるゝは、念佛往生の機なればなり。如來敎法元無二なれども、正爲衆生機不同なれば、わが根機にまかせて領解する條、宿善の厚薄によるなり。念佛往生は佛の本願なり。諸行往生は本願にあらず。念佛往生には臨終の善惡を沙汰せず、至心信樂の歸命の一心、他力よりさだまるとき、卽得往生住不退轉の道理を、善知識にあふて、聞持する平生のきざみに、治定するあひだ、

この穢體亡失せずといへども業事成辨するは、體失せずして往生すといはるゝ歟。本願の文あきらかなり。かれをみるべし。諸行往生の機は臨終を期し、來迎をまちゐずしては、胎生邊地までもむまるべからず。このゆへにこの穢體亡失するときならでは、その期するところなきによりて、そのむねをのぶる歟。第十九の願にみへたり。勝劣の一段にをいては、念佛往生は本願なるについて、あまねく十方衆生にわたる。諸行往生は非本願なるによりて、定散の機にかぎる。本願念佛の機の不體失往生と、非本願諸行往生の機の體失往生と、殿最懸隔にあらずや。いづれも、文釋ことばにさきだちて歴然なり。〔口傳鈔〕

○夫れ眞實の信樂を案ずるに信樂に一念あり。一念とは斯れ信樂開發の時尅の極速を顯し廣大難思の慶心を彰すなり。〔敎行信證〕

實相爲物

○云何が實の如く修行せず、名義と相應せざると爲すや。謂く如來は是れ實相身なり、是れ爲物身なりと知らざればなり。〔往生論註〕

○第一義諦是佛因緣法也。〔往生論註〕（第一義諦とは實相なり。不生不滅なり、不增不減なり、不去不來なり、常住なり。因緣法とは、世諦なり、假相なり、生滅なり、增減なり、去來なり、不

常住なり。大般涅槃經には「常住之法無有因緣」と言へり。今此の兩者相反せるものを以て同一なりとし、第一義諦是佛因緣法なりと言ふ。群疑爰に起り、妙趣亦此中に生ず。是れ即ち極樂國の妙境界相なり。是の疑點に付き六朝諸家の皆誤謬を生ぜし難局なりとす。幸ひに曇鸞大師は是を次ぎに引ける文に於て反覆丁重、其の解說を加へ、以て一千四百餘年、猶炳として、日を視るが如し。〔曇祖見眞大師〕

憍慢の衆生

○和讃にいはく、金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてける、とさふらうは、信心のさだまる時に、ひとたび攝取して、すてたまはざれば、六道に輪廻すべからず。しかればながく生死をば、へだてさふらうぞかし。かくのごとくしるを、さとるとはいひまぎらかすべきや。あはれにさふらうをや。淨土眞宗には、今生に本願を信じて、かの土にして、さとりをばひらくと、ならひさふらうぞとこそ、故聖人のおほせにはさふらひしか。〔歎異鈔〕

○薩遮答へて言く、大德迦葉。われ若しこれをこれ菩提、これを是れ證と見るあらば、われは、應に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。……

薩遮答へて言く、大德迦葉。汝の今言ふところの、無量無邊の諸衆生等が阿耨多羅三藐三菩提を成ずるは、これこの憍慢の衆生の數なり。何を以ての故に。大德迦葉。第一義中に於て、菩提は不可得なり。菩薩は不可得なり。〔大薩遮尼乾子所說經〕

○得た晴れた證つたといふその奴が先に死ぬるを知らぬおろかさ。〔讀人知らず〕

金剛の眞心

○眞佛弟子と言ふは、眞の言は僞に對し假に對するなり。弟子とは釋迦諸佛之弟子也。金剛心の行人也。斯信行に由りて必ず大般涅槃を超證す可きが故に眞佛弟子と言ふ。〔敎行信證〕

○信に知ぬ。又至心信樂 欲生其言異なりと雖も其意惟一なり。何の故に、三心已に疑蓋雜ることと無し。故に眞實の一心は是を金剛の眞心と名く。金剛の眞心是を眞實の信心と名く。眞實の信心は必ず名號を具す。名號は必ずしも願力の信心を具せざるなり。是故に論主は建めに我一心と言ひ玉まへり。又如彼名義欲如實修行相應故と言へり。〔敎行信證〕

○三經の大綱顯彰隱密之義ありと雖も、信心を彰はして能入と爲す。故に經の始めに如是と稱す。如是之義 則 善く信ずる相也。今三經を案ずるに、皆金剛の眞心を以て最要と爲せり。眞心卽ち是れ大信心なり。大信心は希有最勝眞妙淸淨なり。〔敎行信證〕

○南天竺に比丘あらん、龍樹菩薩となづくべし。有無の邪見を破すべしと、世尊はかねてときたまふ。願作佛の心はこれ、度衆生のこゝろなり、度衆生の心はこれ、利他眞實の信心なり。信心すなはち一心なり、一心すなはち金剛心、金剛心は菩提心、この心すなはち他力なり。願土にいたればすみやかに、無上涅槃を證してぞ、すなはち大悲をおこすなり、これを廻向となづけたり。〔高僧和讃〕

名　號

○他流には名號よりは繪像、繪像よりは木像といふなり。當流には、木像よりはえざう、繪像よりは名號といふなり。〔蓮如上人御一代記聞書〕

○若し我成佛せんに、十方の衆生、我名號を稱せば、下十聲に至るまで、若し生れずば正覺を取らじ。彼佛今現に在して成佛したまへり。當に知るべし本誓重願虛しからず。衆生稱念すれば、必ず往生を得。〔往生禮讃卅七丁〕

○大行と者即ち無碍光如來の名を稱するなり。斯の行は卽ち是れ諸の善法を攝し諸々の德本を具せり。極速圓滿す。眞如一實の功德寶海なり。故に大行と名く。然るに斯の行者大悲の願より出でたり。即ち是れ諸佛稱揚之願と名く。復諸佛稱名之願と名く。復諸佛咨嗟之願と名く。亦往相廻向之願と名く可し。亦選擇稱名之願と名く可き也。〔敎行信證〕

○爾者名を稱するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を滿て玉ふ。稱名は則是最勝最妙の正業なり、正業則是念佛なり。念佛則是南無阿彌陀佛なり。南無阿彌陀佛即ち是れ正念なりと知る可し。〔敎行信證〕

相　入　相　融（消えてしまう）

○如來世尊は衆生の爲の故に、廣の中に略を說く。略の中に廣を說く。第一義諦を說きて世諦と爲す。世諦の法を說きて第一義諦となす。〔大般涅槃經〕（廣は二十九種の相、略は眞實知慧無爲法身〔曩祖見眞大師〕）

○是の故に廣略相入して統ぬるに法の名を以てす。菩薩若し廣略相入を知らずんば即ち自利利他するに能はず。一法句は謂く淸淨句なり、淸淨句は謂く眞實の智慧無爲法身なるが故にとの玉へり。此の三句は展轉して相入する。何の義に依つてか之れを名けて法と爲す。淸淨を以ての故に。何の義に依つてか名けて淸淨と爲す。眞實の智慧無爲法身を以ての故なり。眞實の智慧は實相の智慧也。實相は無相なるが故に。眞智無知也。〔往生論註〕

信　行　一　致

○この御ちかひをきゝてうたがふこゝろのすこしもなきを、信の一念とまふすなり。信と行と二と
きけども、行をひとこゑするぞときゝてうたがはねば、行をはなれたる信はなしときゝて候。また
信をはなれたる行なしとおぼしめすべし。これみな彌陀の御ちかひと申ことをこゝろうべし。行と
信とは、御ちかひを申なり。穴賢々々。いのち候はゞ、かならずのぼらせたまふべし。〔末燈鈔〕

○そのゆへは彌陀の本願とまふすは、名號をとなへんものをば極樂へむかへんとちかはせたまひ
たるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候なり。信心ありとも、名號をとなへざらんは
詮なく候。又一向名號をとなふとも、信心あさくば往生しがたく候。されば念佛往生とふかく信じ
て、しかも名號をとなへんずるは、うたがひなき報土の往生にてあるべく候なり。〔末燈鈔〕

人師

○なにごともみなわすれて候うへに、人などにあきらかに申べき身にてもあらずさふらふ。よく
〳〵淨土の學生にとひ申給ふべし。穴賢々々。〔末燈鈔〕

○よしあしの文字をもしらぬひとはみな、まことのこゝろなりけるを、善惡の字しりがほは、お
ほそらごとのかたちなり。是非しらず邪正もわかぬこのみなり。小慈小悲もなけれども、名利に
人師をこのむなり。〔正像末和讃〕

虛妄

○大慧よ、四種の因緣によりて眼識は轉ず。何等をか四と爲す。謂ゆる自心所現を覺らずして執
取すると、無始時來の戲論虛妄習氣によりて色に取著すると、識の本性によると、種々の色相を樂
見すると是なり。大慧よ、この四緣を以て瀑流中の水の如き阿賴耶識より轉識の波浪は生ず。大慧
よ、眼識の如く餘識も亦是の如し。〔入楞伽經〕

還相廻向

○二に還相廻向と言ふは則是れ利他敎化地の益なり。則是れ必至補處の願より出たり。亦一生補處
の願と名く可く、亦還相廻向の願と名く可き也。註論に顯れたり。故に願文を出さず論の註を披く
可し。〔敎行信證〕

○無始流轉の苦をすてゝ、無上涅槃を期することゝ、如來二種の廻向の、恩德まことに謝しがた
し。……南無阿彌陀佛の廻向の、恩德廣大不思議にて、往相廻向の利益には、還相廻向に廻入
せり。往相廻向の大慈より、還相廻向の大悲をう、如來の廻向なかりせば、淨土の菩提はいかゞせ
ん。〔正像末和讃〕

詮鑒と信心

○愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚のかずに、いることをよろこばず、眞證の證にちかづく事を、たのしまずとまうす沙汰に、不審のあつかひどもにて往生せんずるか、すまじきなんどゝ互にまうしあひけるを、ものごしにきこしめされて。愛欲も名利もみな煩惱なり、されば機のあつかひをするは、雜修なりとおほせ候なり。たゞ信ずるほかは別のことなしと仰られ候。〔蓮如上人御一代記聞書〕

○彌陀の誓願不思議に、たすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まふさんと、おもひたつこゝろのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。彌陀の本願には、老少善惡のひとを、えらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生を、たすけんがための願にましまます。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに。惡をもおそるべからず、彌陀の本願を、さまたぐるほどの惡なきゆへにと。云々。〔歎異鈔〕

○罪福ふかく信じつゝ、善本修習するひとは、疑心の善人なるゆへに、方便化土にとまるなり。彌陀の本願信ぜねば、疑惑を帶してむまれつゝ、はなはすなはちひらけねば、胎に處するにたとへたり。〔正像末和讃〕

○聖人のおほせには、善惡のふたつ、總じて、存知せざるなり。そのゆへは、如來の御こゝろによしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしと、おぼしめすほどに、しりとほしたらばこそ、あしきをしりたるにてもあらめど。〔歎異鈔〕

○此れを雜毒の善なりとなせり。即ち貪瞋邪僞奸詐百端にして、惡性侵み難し。事蛇蝎に同じ。三業を起すと雖も、名けて雜毒の善となす。眞實の行と名けざるなり。縱ひ身心を苦勵して、日夜十二時急走急作頭燃をはらふが如くするも、是れを雜毒の善と名づく。此の雜毒の行を廻して、彼佛の淨土に生ぜんと求むる者、此れ必ず不可なり。〔散善義〕

○おほよそ凡夫引接の無緣の慈悲をもて、修因感果したまへる別願所成の報佛報土へ、五乘ひとしくいることは、諸佛いまだをこさゞる超世不思議の願なれば、たとひ讀誦大乘解第一義の善機たりといふとも、をのれが生得の善ばかりをもてその土に往生することかなふべからず。また惡業はもと、もろ〳〵の佛法にすてらるゝところなれば、惡機また惡をつのりとしてその土へのぞむべきにあらず。しかれば機にむまれつきたる善惡のふたつ、報土往生の得ともならず失ともならざる條勿論なり。さればこの善惡の機のうへにたもつところの彌陀の佛智をつのりとせんよりほかは、凡夫いかでか往生の得分あるべきや。さればこそ惡もおそろしからずともいひ、善もほしからずと

はいへ。こゝをもて光明寺の大師、言弘願者如大經說、一切善惡凡夫得生者、莫不皆乘阿彌陀佛、大願業力爲增上緣也とのたまへり。〔口傳鈔〕

○しかれども一人にても、ころすべき業緣なきによりて害せざるなり。わがこゝろのよくて、ころさぬにはあらず。また害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあるべしと、おほせのさふらひしは、われらがこゝろのよきをば、よしとおもひ、あしきことをば、あしとおもひて、本願の不思議にて、たすけたまふといふことを、しらざることを、おほせのさふらひしなり。〔歎異鈔〕

○出世のこゝろおほく、淨土の業因すくなしと候なるは、こころえがたく候。出世と候も、淨土の業因と候も、みなひとつにて候なり。すべてこれなまじゐなる御はからひと存候。佛智不思議と信ぜさせたまひ候なば、別にわづらはしく、とかくの御はからひあるべからず候。たゞ人のとかく申し候はんことをば、御不審あるべからず候。たゞ如來の誓願にまかせまいらせたまふべく候。とかくの御はからひあるべからずさふらふなり。あなかしこ〳〵。〔末燈鈔〕

體と用

○即ち佛の名號を以て經の體となすなり。〔敎行信證〕

○體を得て用を得る者は成り、用を得て體を得る者は變ず。剛を先にして兵を學ぶものは勝主と爲り、兵を學んで剛に志す者は敗將と爲る。〔鬪戰經〕

信心の人（正定聚、一生補處）

○たづねおほせられて候事、かへすゞめでたく候。まことの信心をえたるひとは、すでに佛になりたまふべき御身となりておはしますゆへに、如來とひとしき人と經にとかれて候なり。彌勒はいまだ佛になりたまはねども、このたびかならず佛になりたまふべきによりて、彌勒をばすでに彌勒佛と申候なり。その定に、眞實信心をえたるひとをば、如來とひとしとおほせられて候なり。又乘信房の、彌勒とひとしと候も、ひがごとにては候はねども、他力によりて信をえてよろこぶ心は、如來とひとしと候を、自力なりと候らんは、いますこし乘信房の御こゝろのそこの、ゆきつかぬやうにきゝ候こそ、よく御案あるべくや候らん。自力のこゝろにて、わが身は如來とひとしと候はんは、まことにあしく候べし。他力の信心のゆへに、淨信房のよろこばせたまひ候らんは、なにかは自力にて候べき。よく〳〵御はからひ候べし。このやうは、この人々にくはしく申候。乘信御房にとひまいらせたまふべくさふらふ。穴賢々々。〔末燈鈔〕

○この人を、正念に住する人とす。この人は攝取してすてたまはざれば、金剛心をえたる人といふなり。この人を上々人とも、好人とも、妙好人とも、最勝人とも、希有人とともまふすなり。この

人は、正定聚のくらゐにさだまれるなりとしるべし。しかれば彌勒佛とひとしき人とのたまへり。〔末燈鈔〕

○このゆへにまことの信心の人をば、諸佛とひとしとまふすなり。また補處の彌勒とおなじともまふすなり。この世にて眞實信心の人をまもらせたまへばこそ、阿彌陀經には十方恒沙の諸佛護念すとはまふすことにては候へ、安樂淨土への往生してのちに、まもりたまふとまふすことにては候はず。娑婆世界にいたるほど護念すとはまふすことなり。信心まことなる人のこゝろを、十方恒沙の如來のほめたまへば、佛とひとしとまふすことなり。また他力と申ことは、義なきを、義とすとまふすなり。義とまふすことは、行者のをの〳〵のはからふことを、義とは申すなり。如來の誓願は不可思議にましますゆへに、佛と佛との御はからひなり。凡夫のはからひにあらず。補處の彌勒菩薩をはじめとして、佛智の不思議をはからふべき人は候はず。しかれば如來の誓願には、義なきを義とするは、大師聖人のおほせに候き。〔末燈鈔〕

○淨土の眞實信心の人は、この身こそあさましき不淨造惡の身なれども、心はすでに如來とひとしければ、如來とひとしとまふすこともあるべしとしらせたまへ。〔末燈鈔〕

○金剛堅固の信心は、佛の相續よりおこる、他力の方便なくしては、いかでか決定心をえん。大願海のうちには、煩惱のなみこそなかりけれ、弘誓のふねにのりぬれば、大悲の風にまかせたり。超世の悲願きゝしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨土にあそぶなり。六八の弘誓のそのなかに、第三十五の願に、彌陀はことに女人を、引接せんとちかひしか。〔帖外和讃〕

惡人正機

○善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。しかるを、世のひと、つねにいはく、惡人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この條一旦、そのいはれあるにはたれども、本願他力の意趣にそむけり。

そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、彌陀の本願にあらず。しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐるなり。

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして惡人は、とおほせさふらひきと云々。〔歎異鈔〕

藥あり毒を好めにあらず

○法然聖人の御弟子のなかにも、われはゆゆしき學生などとおもひあひたる人々も、この世にはみなやう〳〵に法文をいひかへて、身もまどひ、人をもまどはしてわづらひあふて候めり。聖敎のをしへをもみずしらぬをの〳〵のやうにおはしますひと〴〵は、往生にさはりなしとばかりいふをききて、あしざまに御こころえあることおほく候き。いまもさこそ候らめとおぼえ候。淨土の敎もしらぬ信見房などが申ことによりて、ひがさまにいよ〳〵なりあはせたまひ候らんをきき候こそ、あさましく候へ。まづをの〳〵の昔は、彌陀のちかひをもしらず、阿彌陀佛をもまふさずおはしまし候しが、釋迦彌陀の御方便にもよほされて、いま彌陀のちかひをききはじめておはします身にて候なり。もとは無明の酒にゑひて、貪欲、瞋恚、愚癡の三毒をのみこのみめしあふて候つるに、佛のちかひをききはじめしより、無明の醉もやうやうすこしづつさめ、三毒をもすこしづつこのまずして、阿彌陀佛のくすりを、つねにこのみめす身となりておはしましあふて候ぞかし。しかるになをゑひもさめやらぬに、かさねて醉をすすめ、毒もきえやらぬに、なを毒をすすめられ候らんこそ、あさましく候へ。煩惱具足の身なればとて、こころにまかせて、みにもすまじきことをもゆるし、くちにもいふまじきことをもゆるし、こころにもおもふまじきことをもゆるして、いかにもこ

ころのままにてあるべしと、まふしあふて候らんこそ、返々不便におぼえ候へ。ゑひもさめぬさきになを酒をすすめ、毒もきえやらぬにいよ〳〵毒をすすめんがごとし。くすりあり毒をこのめと候らんことは、あるべくもさふらはずとこそおぼえ候、佛の御名をもきゝ、念佛を申して、ひさしくなりておはしまさん人々は、後世のあしきことをいとふしるし、この身のあしきことをば、いとひすてんとおぼしめすしるしも候べしとこそおぼえ候へ。はじめて佛のちかひをきゝはじむる人々の、わが身のわろく、こころのわろきをおもひしりて、この身のやうにてはなんぞ往生せんずるといふ人にこそ、煩惱具足したる身なればわがこゝろの善惡をばさたせず、むかへたまふぞとは申候へ。かくきゝてのち、佛を信ぜんとおもふこゝろふかくなりぬるには、まことにこの身をもいとひ、流轉せんことをもかなしみて、ふかくちかひを信じ、阿彌陀佛をもこのみまふしなんどする人は、もともこゝろのまゝにて惡事をもふるまひなんどせじとおぼしめしあはせたまはゞこそ、世をいとふしるしにても候はめ。また往生の信心は、釋迦、彌陀の御すゝめによりておこるゞこそみえて候へば、さりともまことのこゝろおこらせたまひなんには、いかゞむかしの御こゝろのまゝにては候べき。この御中の人々も、少々はあしきさまなることのきこえ候めり。師をそしり、善知識をかろしめ、同行をもあなづりなんどしあはせたまふよしきゝ候こそ、あさましく候へ、すでに謗法

のひとなり、五逆のひとなり、なれむつぶべからず。浄土論と申文には、かやうの人は佛法信ずるこゝろなきより、このこゝろはおこるなりと候めり。また至誠心のなかには、かやうに悪をこのまんひとには、つゝしみてとをざかれ、ちかづくべからずとこそ、とかれて候へ。善知識同行には、したしみちかづけとこそ、ときをかれて候へ。悪をこのむ人にもちかづきなんどすることは、浄土にまいりてのち、衆生利益にかへりてこそ。さやうの罪人にもしたしみちかづくことは候へ。それもわがはからひにはあらず。彌陀のちかひによりて、御たすけにてこそ、おもふさまのふるまひも候はんずれ。當時はこの身どものやうにては、いかゞ候べからんとおぼえ候。よく〳〵案ぜさせたまふべくさふらふ。往生の金剛心のおこることは、佛の御はからひよりおこりて候へば、金剛心をとりて候はん人は、よも師をそしり、善知識をあなづりなんどすることは候はじとこそおぼえ候へ。この文をもて、かしまなめかたの南の莊いつかたも、これにこゝろざしおはしまさん人には、おなじ御こゝろによみきかせたまふべく候。穴賢々々。〔末燈鈔〕

○年比念佛して往生をねがふしるしには、もとあしかりしわがこゝろをもおもひかへして、ともに同朋にもねんごろにこゝろのおはしましあはばこそ、世をいとふしるにても候はめとこそおぼえ候へ。よく〳〵御こころえ候べし。善知識をそろかにおもひ、師をそしるものをば、謗法のものと申なり。親をそしるものをは、五逆のものと申なり。同座せざれと候なり。されば北の郡に候し善乘房は、親をのり、善信をやう〳〵にそしり候しかば、ちかづきむつまじくおもひ候はで、ちかづけず候き。明法御房の往生のことをきゝながら、あとををろかにせん人々は、その同朋にあらず候べし。無明の酒に醉たる人に、いよ〳〵ゑひをすすめ、三毒をひさしくこのみくらふ人に、いよいよ毒をゆるしてこのめと申しあふて候らん、不便のことに候。無明の酒に醉たることをかなしみ、三毒をこのみくふて、いまだ毒もうせはてず無明のゑひもいまださめやらぬにおはしましあふて候ぞかし。よく〳〵御こころえ候べし。〔末燈鈔〕

○われ往生すべければとて、すまじきことをもし、おもふまじきことをもおもひ、いふまじきことをもいひなどすることはあるべくも候はず。貪欲の煩惱にくるはされて、欲もおこり、瞋恚の煩惱にくるはされて、ねたむべくもなき因果をやぶるこゝろもおこり、愚癡の煩惱にまどはされて、おもふまじきことなどもおこることにてこそ候へ。めでたき佛の御ちかひあればとて、わざとすまじきことどもをもし、おもふまじきことどもをもおもひなんどせんは、よく〳〵この世のいとはしからず、身のわろきことをもおもひしらぬにて候へば、念佛にこゝろざしもなく、佛の御ちかひにもこゝろざしのおはしまさぬにて候へば、念佛せさせたまふとも、その御こゝろざしにては順次の

往生もかたくや候べからん。〔末燈鈔〕

○つぎに、念佛せさせたまふ、ひとぐ〳〵のこと、彌陀の御ちかひは、煩惱具足のひとのためなりと、信ぜられさふらふは、めでたきやうなり。たゞし、わるきものゝためなりとて、ことさらに、ひがごとをこゝろにもおもひ、身にも口にも申すべしとは、淨土宗にまふすことならねば、ひとぐ〳〵にも、かたることさふらはず。おほかたは、煩惱具足の身にて、こゝろをもとゞめがたくさふらひながら、往生をうたがはずせんと、おぼしめすべしとこそ、師も善知識も、まふすことにてさふらふに、かゝるわるき身なれば、ひがごとを、ことさらにこのみて、念佛のひとぐ〳〵の、さはりとなり、師のためにも、善知識のためにも、とがとなさせたまふべしと、まふすことは、ゆめ〳〵なきことなり。〔親鸞聖人御消息集〕

○凡夫のならひなれば、わるきこそ本なればとて、おもふまじきことをこのみ、身にすまじきことをし、口にもいふまじきことを、まふすべきやうに、まふされさふらふこそ、信願坊がまふしやうとは、こゝろえずさふらふ、往生にさはりなければとて、ひがごとをこのむべしとは、まふしたることさふらはず。〔親鸞聖人御消息集〕

○そのかみ邪見におちたるひとありて、悪をつくりたるものを、たすけんといふ願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて、往生の業とすべきよしをいひて、やう〳〵に、あしざまなることの、きこへさふらひしとき、御消息に、くすりあればとて毒をこのむべからずとこそ、あそばされてさふらうは、かの邪執をやめんがためなり。またく悪は往生のさはりたるべしとにはあらず。〔歎異鈔〕

煩惱即菩提

○本願圓頓一乘は、逆悪攝すと信知して、煩惱菩提體無二と、すみやかにとくさとらしむ。……盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ、一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ。無碍光の利益より、威德廣大の信をえて、かならず煩惱のこほりとけ、すなはち菩提のみづとなる。罪障功德の體となる、こほりとみづのごとくにて、こほりおほきにみづおほし、さはりおほきに德おほし。〔高僧和讃〕

信心の力

○安樂淨土にいたるひと、五濁悪世にかへりては、釋迦牟尼佛のごとくにて、利益衆生はきはもなし。神力自在なることは、測量すべきことぞなき、不思議の德をあつめたり、無上尊を歸命せよ。〔淨土和讃〕

○大慈悲を以て、一切苦惱の衆生を觀察して、應化身を示して、生死の園、煩惱の林の中に回入して、神通に遊戯し教化地に至る、本願力の回向を以ての故に。〔淨土論〕

自然法爾

○信心さだまりなば、往生は彌陀にはからはれまひらせてすることなれば、わがはからひなるべからず、わろからんにつけても、いよ〳〵願力をあをぎまひらせば、自然のことはりにて、柔和忍辱のこゝろもいでくべし。すべてよろづのことにつけて、往生には、かしこきおもひを具せずして、たゞほれ〴〵と、彌陀の御恩の深重なること、つねにおもひいだしまひらすべし。しかれば、念佛も申されさふらう。これ自然なり。わがはからはざるを、自然とまふすなり。これすなはち他力にてまします。しかるを自然といふことの、別にあるやうに、われものしりがほにいふひとのさふらうよし、うけたまはる、あさましくさふらう。〔歎異鈔〕

○專修念佛のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ爭論のさふらうらんこと、もてのほかの仔細なり。親鸞は弟子一人も、もたずさふらう。そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念佛をまふさせさふらはゞこそ、弟子にてもさふらはめ。彌陀の御もよほしにあづかりて、念佛まふしさふらうひとを、わが弟子とまふすこと、きはめたる荒凉のことなり。つくべき緣あればともなひ、はなるべき緣あれば、はなるゝことのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなり、なんどいふこと不可說なり。如來よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまふすにや。かへすゞもあるべからざることなり。自然のことはりに、あひかなはゞ、佛恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと。云々。〔歎異鈔〕

正義

○忿を絕ち瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり。心各々執ることあり。彼れ是とするときは我は非とす。我れ是とするときは、彼は非とす。我れ必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是とし、非とするの理、誰れか能く定むべき。〔聖德太子憲法第十條〕

學匠沙汰（會解講釋）

○もろこし我朝にもろ〳〵の智者たちの沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず。又學問をして念のこゝろをさとりて申す念佛にもあらず。たゞ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申せば、疑ひなく往生するぞと思ひとりて、申すほかには別の仔細候はず。但し三心四修なんど申すことの候は、みな決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふうちにこもり候なり。この外に奥深きことを存ぜば、二尊の御あはれみにはづれ本願にもれ候べし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法をよく〳〵

學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらにおなじくして、智者のふるまひをせずして、唯一向に念佛すべし。〔一枚起請文〕

○かまへて學匠沙汰せさせたまひさふらはで、往生をとげさせたまひ候べし。故法然聖人は、淨土宗の人は愚者になりて往生すと候しことを、たしかに、うけたまはり候しうへに、ものもおぼえぬ、あさましき人々の、まいりたるを御覽じては、往生必定すべしとて、ゑませたまひしを、みまいらせさふらひき。文沙汰して、さか〳〵しきひとのまいりたるをば、往生はいかがあらんずらんと、たしかに、うけたまはりき。いまにいたるまで、おもひあはせられ候なり。ひと〴〵に、すかされさせたまはで、御信心たぢろがせ、たまはずして、をの〳〵御往生候べきなり。たゞしひとに、すかされさせたまひ候はずとも、信心のさだまらぬ人は、正定聚に住したまはずして、うかれたまひたる人なり。〔末燈鈔〕

○各々十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。しかるに、念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめしおはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にも、ゆゝしき學生だち、おほく座せられてさふらふなれば、かのひと〴〵にもあひたてまつりて、往生の要よく〳〵きかるべきなり。〔歎異鈔〕

○いまの世には、學問してひとの、そしりをやめん、ひとへに論議問答をむねとせんと、かまへられさふらうにや。學問せばいよ〳〵如來の御本意をしり、悲願の廣大のむねをも存知して、いやしからん身にて、往生はいかゞなんどと、あやぶまれんひとにも、本願には善惡淨穢なきおもむきをもときゝかせられさふらはゞこそ、學生の甲斐にてもさふらはめ。〔歎異鈔〕

無碍の一道

○念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなれば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も、業報も、感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆへに無碍の一道なりと。〔歎異鈔〕

二河白道

○一切往生人等に白さく。今更に行者のために、一譬喩を說きて、信心を守護し、以て外邪異見の難を防がむ。何者か是なる。

譬へば人ありて、西に向ひて行かむと欲するに、百千里ならむ。忽然として、中路に二の河あるを見る。一には是れ火の河にして、南にあり。二には是れ水の河にして、北にあり。二河各闊さ百步、

各深くして底なし。南北に邊なし。正しく水火の中間に、一の白道あり、闊さ四五寸許なるべし。此道、東岸より西岸に至るに、亦長さ百歩なり。其水の波浪、交はり過ぎて道を濕ほし、其火の燄亦來りて道を燒き、水火相交はりて、常に休息ことなけむ。

此人既に空曠の迥かなる處に至るに、更に人物なし、多く群賊惡獸ありて、此人の單獨なるを見て競ひ來りて殺さむと欲す。此人、死を怖れて、直に走りて、西に向ふに、忽然として此大河を見る。即ち自ら念言すらく、此河南北に邊畔を見ず。中間に一の白道を見るも、極めてこれ狹少なり。二つの岸相去ること近しと雖も、何に由りてか行くべき。今日、定めて死せむこと疑はず。正しく到り回らむと欲すれば、群賊惡獸漸々に來り逼る。正しく南北に避け走らむと欲すれば、惡獸毒蟲競ひ來りて我に向ふ、正しく西に向ひて道を尋ねて、ゆかむと欲すれば、復た恐らくは、この水火の二河に墮せむことをと。時に當りて惶怖すること、復た言ふべからず。即ち自ら思念すらく。我今回らば亦死せむ、住まらば亦死せむ、去かば亦死せむ。一種として死を免れざれば、我寧ろ此道を尋ねて、前に向ふてゆかむ。既に此道あり、必ず應に度るべけむと。

此念をなす時、東岸に忽ち人の勸むる聲を聞く。仁者たゞ決定して、此道をたづねて行け、必ず死の難なけむ、若し住まらば即ち死せむと。又西の岸の上に、人ありて喚ふて言はく、汝一心正念にして、直に來れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に墮せむことを畏れざれと。此人、既に此に遣はし、彼に喚ぶを聞いて、即ち自ら正しく、身心に決定して道を尋ねて、直に進みて疑怯退心を生せず。或は行くこと一分二分するに、東の岸の群賊等、喚んで曰はく、仁者回り來れ、此道險惡なり、過ぐることを得じ、必ず死せむこと疑はず、我等すべて惡心ありて、相向ふことなしと。此人、喚ぶ聲を聞くと雖も亦廻顧みず。一心に直に進みて、道を念じて行けば、須臾にして、即ち西の岸に到りて、永く諸難を離れ、善友、相見て、慶樂すること已むことなきが如し。此はこれ譬なり。

次に喩を合はせば、東の岸といふは、即ち此娑婆の火宅に喩ふるなり。西の岸といふは、極樂寶國に喩ふるなり。群賊惡獸、詐はり親しむといふは、即ち衆生の六根、六識、六塵、五陰、四大に喩ふるなり。無人空曠の澤といふは、即ち常に惡友に隨ひて、眞の善知識にあはざるに喩ふるなり。水火の二河といふは、衆生の貪愛は水の如く、瞋憎は火の如しと喩ふるなり。中間の白道の四五寸といふは、衆生の貪瞋煩惱の中に、能く清淨願往生の心を、生ぜしむるに喩ふるなり。乃ち貪瞋强きに由るが故に、水火の如しとたとへ、善心微かなるが故に白道の如しとたとふ。又水波常に道を濕ほすとは、即ち愛心常に起りて、能く善心を染汚するに喩へ、又火燄常に道を燒くとは、瞋嫌の

心能く功德の法財を燒くに喩ふ。人、道上を行いて直に西に向ふといふは、即ち諸の行業を廻して直に西方に向ふに喩ふ。東の岸に人の聲ありて、勸め遣はすを聞いて、道を尋ねて、直に西に進むといふは、即ち釋迦已に滅したまひて、後の人見たてまつらざれども、なほ敎法ありて尋ぬべきに喩ふ。或は行くこと一分二分するに、群賊等よびかへすといふは、別解別行惡見の人等、妄りに見解をもつて、迭ひに相惑亂し、及び自ら罪を造りて退失すと說くに喩ふ。西の岸の上に、人ありて喚といふは、即ち彌陀の願意に喩ふ。須臾に西の岸に到りて、善友相見て喜ぶといふは、即ち衆生、久しく生死に沈みて、曠劫より輪廻し、迷倒して自ら纏ふて、解脫するに由なし、仰いで釋迦發遣して、指へて西方に向はしめたまふことを蒙り、又彌陀の悲心招喚したまふによりて、今二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず念々に、遣るゝことなく、彼の願力の道に乘じて、捨命已後、彼國に生まるゝを得て、佛と相見て、慶喜すること何ぞ極まらんといふに、たとふる也。〔散善義〕

觀念の遊戯

○これによりて十乘三諦の月觀念秋をおくり、百界千如の花薫修としをかさぬ。こゝにつら〳〵出要をうかゞふてこの思惟をなさく、定水をこらすといへども、識浪しきりにうごき、心月を觀ずといへども、妄雲なをおほふ。しかるに一息つがざれば、千載にながくゆく。なんぞ浮生の交衆をむさぼりて、いたづらに假名の修學につかれん。すべからく勢利をなげすてゝ、たゞちに出離をねがふべしと。〔嘆德文〕

精　進

○假令大千世界の滿中せる猛火を經過するも、法を求むる爲の故に退屈諂僞之心を生ぜざれ。〔大無量壽經〕

○勇猛の衆生のためには成佛一念にあり。懈怠の衆生のためには涅槃三祇に亘る。〔澤水法語〕

報謝の念佛

○信心のひとにおとらじと、疑心自力の行者も、如來大悲の恩をしり、稱名念佛はげむべし。〔歎異鈔〕

○そのゆへは彌陀の光明に、てらされまひらするゆへに、一念發起する時、金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐに、おさめしめたまひて、命終すれば、もろ〳〵の煩惱惡障を轉じて、無生忍をさとらしめたまふなり。この悲願ましまさずば、かゝるあさましき罪人、いかでか生死を解脫すべきとおもひて、一生のあひだまふすところの念佛は、みなこと〴〵く、如來大悲の恩

を報じ、徳を謝すとおもふべきなり。〔歎異鈔〕

○彌陀の名號となへつつ、信心まことにうるひとは、憶念の心つねにして、佛恩報するおもひあり。誓願不思議をうたがひて、御名を稱する往生は、宮殿のうちに五百歳、むなしくすぐとぞときたまふ。〔淨土和讃〕

○もろ〳〵の雜行雜修自力のこゝろをふりすてゝ、一心に阿彌陀如來、我等が今度の一大事の後生御たすけさふらへとたのみまうして候。たのむ一念のとき往生一定、御たすけ治定と存じ、このうへの、稱名は、御恩報謝とよろこびまうし候。この御ことはり聽聞まうしわけさふらふこと、御開山聖人御出世の御恩、次第相承の善知識のあさからざる御勸化の御恩と、ありがたく存じ候。このうへは定めおかせらるゝ御掟、一期をかぎりまもりまうすべく候。〔改悔文〕

あなたさまの御はからひ

○罪のあるなしの沙汰をせんよりは、信心を取たるか、取ざるかの沙汰を、いくたびも〳〵。よし罪きえて御たすけあらんとも、つみ消ずして御たすけあるべしとも、彌陀の御はからひなり。我としてはからふべからず。たゞ信心肝要なりと、くれ〳〵仰られ候なり。〔蓮如上人御一代記聞書〕

○餘のひと〳〵を緣として、念佛をひろめんと、はからひあはせたまふことゆめ〳〵あるべからずさふらふ。そのところに念佛の、ひろまりさふらはんことも、佛天の御はからひにてさふらふべし。慈信坊がやう〳〵に、まふしさふらふなるによりて、ひと〳〵も、御こゝろどものやう〳〵に、ならせたまひさふらふよし、うけたまはりさふらふ。かへす〳〵不便のことにさふらふ。ともかくも佛天の御はからひに、まかせまいらせたまふべし。そのところの緣ぞつきて、おはしましさふらはゞ、いづれのところにても、うつらせたまひさふらふて、おはしますやうに、御はからひさふらふべし。〔親鸞聖人御消息集〕

○まづ彌陀の大悲大願の、不思議にたすけられまひらせて、生死をいづべしと信じて、念佛申さるゝも、如來の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからの、はからひまじはらざるがゆへに、本願に相應して眞實報土に往生するなり。これは誓願の不思議を、むねと信じたてまつれば、名號の不思議も具足して、誓願名號の不思議ひとつにして、さらにことなることなきなり。〔歎異鈔〕

○念佛は行者のために非行非善なり。わがはからひにて行ずるにあらざれば、非行といふ。わがはからひにて、つくる善にもあらざれば、非善といふ。ひとへに他力にして、自力をはなれたるゆ

へに行者のためには非行非善なりと。〔歎異鈔〕

善知識(明師)の仰せ

○道俗時衆共に同心に、唯だ、この高僧の說を信ずべし。〔正信偈〕

○親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信ずるほかに別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり、たとひ法然上人にすかされまひらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ、そのゆへは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまふして地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。〔歎異鈔〕

○そのゆへは明師にあひたてまつらでやみなましかば、決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆへにとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて、惡道へゆかばひとりゆくべからず、師とともにおつべし。されば、たゞ地獄なりといふとも、故聖人のわたらせたまふところへまいらんとおもひかためたれば、善惡の生所わたくしのさだむるところにあらずといふなりと、これ自力をすてゝ

他力に歸するすがたなり。〔執持鈔〕

○彌陀の本願まことに、おはしまさば釋尊の說敎、虛言なるべからず、佛說まことに、おはしまさば、善導の御釋虛言したまふべからず、善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや、法然のおほせ、まことならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらうか。詮ずるところ、愚身が信心におきては、かくの如し。このうへは、念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと。云々。〔歎異鈔〕

勝他利養名聞(立身出世)

○誠に知ぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず。眞證のさとりに近づくことをたのしまず。耻づべし、傷むべし矣。〔敎行信證〕

○聖人のたまはく、あたら修行者が、もとどりをきらでゆくはとよと。その御こゝろはるかに、みゝにいりけるにや、たちかへりて、まふしていはく、聖光は出家得度して、としひさし。しかるに髻をきらぬよし、おほせをかうふる、もとも不審。このおほせ耳にとまるによりて、みちをゆくにあたはず。ことの次第をうけたはり、わきまへんがために、かへりまいれりと云々。そのとき聖人のたまはく、法師にはみつの髻あり。いはゆる勝他、利養、名聞これなり。この三箇年のあ

ひだ源空が、のぶるところの法門を、しるしあつめて隨身す。本國にくだりて人を、しへたげんとす。これ勝他にあらずや。それにつけて、よき學生といはれんとおもふ。これ名聞をねがふところなり。よりて檀越をのぞむこと、所詮利養のためなり。このみつのもとゞりを、そりすてずば、法師といひがたし。仍さまふしつるなりと云々。そのとき聖光房改悔のいろをあらはして、負のそこより、おさむるところの鈔物どもをとりいでゝ、みなやりすてゝ、またいとまをまふしていでぬ。しかれども、その餘殘ありけるにや、つゐにおほせをさしをきて、口傳にそむきたる、諸行往生の自義を骨張して、自障障他すること、祖師の遺訓をわすれ、諸天の冥慮を、はゞからざるにやとおぼゆ。かなしむべし、をそるべし、しかればかの聖光房は、最初に鸞聖人の御引導によりて黒谷の門下にのぞめるひとなり。末學これをしるべし。〔口傳鈔〕

○まことにこのことはりにまよひはんべらんひとは、いかにも〳〵學問して、本願のむねをしるべきなり。經釋をよみ學すといへども、聖教の本意をこゝろえざる條、もとも不便のことなり。一文不通にして、經釋のゆくちもしらざらんひとの、となへやすからんための名號にておはしますゆへに、易行といふ。學問をむねとするは聖道門なり。難行となづく。あやまて學問して、名聞利養のおもひに住するひと、順次の往生いかゞあらんずらんといふ證文もさふらうぞかし。〔歎異鈔〕

地切り場切り

○雨は降る薪はぬれる日は暮れる背で子が泣く飯はこげつく。〔讀人知らず〕

（二）

浮世の凡夫

○持戒持律のみにて、本願を信ずべくば、われらいかでか生死をはなるべきや。かゝるあさましき身も本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさふらへ。さればとて身にそなへざらん惡業はよもつくられさふらはじものを。また、うみかはに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまにしゝをかり、鳥をとりて、いのちをつぐともがらも、あきなひをもし、田畠をつくりてすぐるひとも、たゞおなじことなり、さるべき業緣のもよほせば、いかなるふるまひもすべしとこそ、聖人はおほせさふらひしに。〔歎異鈔〕

○いまゝた案ずるに善導の、自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流轉して、出離の緣あることなき身としれといふ金言に、すこしもたがはせおはしまさず。〔歎異鈔〕

○爾らば夫れ楞嚴和尙の解義念佛證據門中第十八願は別願中之別願なりと顯開し、觀經定散の

の諸機は極重悪人唯稱彌陀と勸勵する也。濁世の道俗、善く自からの量を思量せよと也と、應に知るべし。〔教行信證〕

諸悪莫作

○諸悪は作す莫れ。衆善は奉行せよ。自ら其意を淨ふする、是諸佛の敎なり。〔涅槃經〕

○なによりも、聖敎のをしへをもしらず、また淨土宗のまことのそこをもしらずして、不可思議の放逸無慚のものどものなかに、悪はおもふさまにふるまふべしと、おほせられ候なるこそ、かへすゞ〳〵あるべくも候はず。北の郡にありし善乘房といひしものに、つゐにあひむつるることなくてやみにしをばみざりけるにや。凡夫なればとて、なにごともおもふさまならば、ぬすみをもし、人をもころしなんどすべきかは。もとぬすみごゝろあらん人も、極樂をねがひ念佛をまふすほどのことになりなば、もとひがうたるこゝろをも、おもひなをしてこそあるべきに、そのしるしもなからん人々に、悪くるしからずといふことゆめ〳〵あるべからず候。煩惱にくるはされておもはざるほかにすまじきことをもふるまひ、いふまじきことをもいひ、おもふまじきことをもおもふにてこそあれ。さはらぬことなればとて、ひとのためにもはらわろく、すまじきことをもし、いふまじきことをもいはゞ、煩惱にくるはされたる儀にはあらで、わざとすまじきこともせば、返々あるまじきことなり。鹿島なめかたの人々のあしからんことをもいひとゞめ、その邊の人々のことにひがみたることをば制したまはゞこそ、この邊より出來しるしにては候はめ。ふるまひはなにともこゝろにまかせよといひつると候らん。あさましきことに候。この世のわろきをもすて、あさましきことをもせざらんこそ、世をいとひ念佛まふすことにては候へ。としごろ念佛する人なんどの、人のためにあしきことをもし、またいひもせば、世をいとふしるしもなし。されば善導の御をしへには、悪をこのむ人をばつゝしんでとをざかれとこそ、至誠心のなかには、をしへおかせおはしまして候へ。いつかわがこゝろのわろきにまかせてふるまへとは候。おほかた、經釋をもしらず、如來の御ことをもしらぬ身に、ゆめ〳〵その沙汰あるべくも候はず、あなかしこ〳〵。〔末燈證〕

○若し諸佛菩薩、世間出世間の善道を說て衆生を敎化する者ましまさずば、豈に仁義禮智信あることを知らむや。是の如き世間の一切善法皆斷んじ、出世間の一切賢聖滅しなむ。汝但五逆罪の重たる事を知て而して五逆罪の正法無き從り生ずることを知らず。是の故に謗正法の人は其の罪最も重なり。〔往生論註〕

断常の二見

○夫。人間の浮生なる相を、つら〳〵觀ずるに、おほよそはかなきものは、この世の始中終、ま

ぼろしのごとくなる一期なり。されば、いまだ萬歳の人身をうけたりといふ事をきかず。一生すぎやすし、いまにいたりて、たれか百年の形體をたもつべきや。我やさき人やさき、けふともしらずあすともしらず、をくれさきだつ人は、もとのしづく、するの露よりもしげしといへり。されば、朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、すなはちふたつのまなこ、たちまちにとぢ、ひとつのいきながくたえぬれば、紅顔むなしく變じて、桃李のよそほひを、うしなひぬるときは、六親眷屬あつまりて、なげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外にをくりて、夜半のけぶりとなしはてぬれば、たゞ、白骨のみぞのこれり。あはれといふも、中々をろかなり。されば人間のはかなき事は、老少不定のさかひなれば、たれの人もはやく、後生の一大事を心にかけて、阿彌陀佛をふかくたのみまいらせて、念佛まうすべきものなり。あなかしこ〳〵。〔御文五帖目〕

○煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞ、まことにて、おはしますとこそ、おほせはさふらひしか。〔歎異鈔〕

○諸行は無常なり。是れ生滅の法。生滅を滅し已り。寂滅を樂と爲す。〔涅槃經〕

○人間、忽々として衆務を營み、年命の日夜に去ることを覺えず。燈の風中に滅して、期し難きが如し。忙々たる六道、定趣なし。未だ解脱して苦海を出づるを得ず。云何が安然として驚懼せざらんや。各々强く健にして、力あるの前に聞きて、自策自勵して常住を求めよ。初夜偈に云く煩惱は深くして底なし。生死の海邊なし。苦を度するの船未だ立たず。云何睡眠を樂はんや。勇猛にして勤めて精進し、心を攝して常に禪に在れ。中夜偈に云く、汝等、臭き屍を抱きて臥する勿れ。種々の不淨を假りに人と名く。重病を得れば、箭の體に入るが如し。衆の苦痛集るに、安ぞ眠るべけんや。後夜偈に云く、時光遷りて流轉す。忽ちにして五更の初に至る。無常念々に至る。常に死王と〻もに居す。諸々の道を行ずる者に勸む。勤め修めて無餘に至れ。〔七祖聖教和譯略抄〕

○如來は常住し、一切衆生悉く佛性有り。〔涅槃經〕

○光明は名づけて智慧と爲す、智慧は即ち是れ常住、如來の正覺は是の如く大般涅槃に安住せり。是の故に名づけて常住無變と爲す。〔涅槃經〕

○如來之身は身に非ず是れ身なり。生ぜず滅せず。習せず修せず。無量無邊にして足跡有ること無し。知無く形無く畢竟清淨にして動搖有ること無し。受無く行無く住せず作さず。味ひ無く雜る

無く、是れ有爲に非ず。業に非ず果に非ず。行に非ず滅に非ず。心に非ず數に非ず、不可思議なり。常に不可思議にして、識無くして心を離れ亦心を離れず。其の心は平等にして、有ること無くして亦有なり。去來有る事無くして亦去來す。破せず壞せず斷ぜず絶せず。出ならず滅ならず主に非ずして亦主なり。有に非ず無に非ず、覺に非ず觀に非ず、字に非ず不字に非ず、定に非ず、不定に非ず。見る可からずして了了として見るべし。處無くして亦處なり。宅無くして亦宅なり。闇無く明無し。寂靜有ること無くして亦寂靜なり。是れ有る所無し。受せず施せず。清淨にして無垢なり。諍無く諍を斷ず。住して住處無し、取らず墮せず。法に非ず非法に非ず。福田に非ず不福田に非ず。盡くること無く盡きずして一切の盡くることを離る。是れ空にして空を離る。常住ならずと雖も念々に滅するに非ず。〔涅槃經〕

○「世尊よ、涅槃が涅槃と云はるゝこの名稱、即ち涅槃は世尊よ何ぞ。」世尊は言へり、「一切識の自性習氣と藏識と意と意識と見習を轉じ已るを涅槃なりと一切諸佛及び我は說けり。これ涅槃趣自性空事の境界なり。」

「復次に大慧よ、涅槃は自證聖智所行境界にして斷常有無の分別を遠離せり。何をか常に非ずと云ふ。謂く、自共相の分別を離れたるが故に常に非ず。斷に非ずとは、謂く、過去未來現在の一切の

聖者は自證に趣けり。故に斷に非ず。」

「復次に大慧よ、大般涅槃は不壞不死なり。若し復大慧よ、大般涅槃は死ならば生に縛せらるべし。若し壞ならば有爲相に墮すべし。大慧よ、この因によりて大般涅槃は不壞不死なり。修行者は死を離れて死を了解すべし。復大慧よ、大般涅槃は捨にあらず、得にあらず、斷にあらず、常にあらず、一義にあらず、無義にあらざるが故に涅槃と云はる。」〔入楞伽經〕

○胎に在つては骨まづ成り。死に在つては骨まづ殘る。天翁と地老と强を以て根となす。故に李眞人曰く、その骨を實にす。

風の黃を拂ひ、霜の蒼を萎ます有り。日南にして暖なし。仰いで造化を觀れば斷あり。吾が武の中にあることを知んぬ。〔鬪戰經〕

○すべて凡夫にかぎらず、補處の彌勒菩薩を初として、佛智の不思議をはからふべきにあらず。まして凡夫の淺智をや。かへすゞ如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり。これを他力に歸したる信心發得の行者といふなり。さればわれとして淨土へまいるべしとも、又地獄へゆくべしともさだむべからず。故聖人（黑谷源空聖人の御ことなり）のおほせに、源空があらんところへゆかんとおもはるべしと、たしかにうけたまはりしうへは、たとへ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへまい

るべしとおもふなり。〔執持鈔〕

○彌陀如來を報身如來とさだむること、自他宗をいはず古來の義勢ことふりんたり。されば荆溪は、諸教所讃多在彌陀とものべ、檀那院の覺運和尚はまた、久遠實成彌陀佛、永異諸經之所說と釋せらる。しかのみならず、わが朝の先哲は、しばらくさしをく、宗師異朝の善導大師の御釋にのたまはく、上從海德初最如來、乃至今時釋迦諸佛、皆乘弘誓悲智雙行とら釋せらる。しからば海德佛より本師釋尊にいたるまで、番々出世の諸佛、彌陀の弘誓に乘じて、自利々他したまへるむね顯然なり。覺運和尚の釋義、釋尊も久遠正覺の彌陀ぞとあらはさるうへは、いまの和尚の御釋にえあはすれば最初海德以來の佛々もみな久遠正覺の彌陀の化身たる條、道理文證必然なり。一字一言加減すべからず、ひとつの經法のごとくすべしとのべまします。光明寺のいまの御釋は、もはら佛經に准ずるうへは、自宗の正依經たるべし。傍依の經にまたあまたの證文あり。楞伽經にのたまはく、十方諸刹土、衆生菩薩中、所有法報身、化身及變化、皆從無量壽、極樂界中出文ととけり。また般舟經にのたまはく、三世諸佛、念彌陀三昧、成等正覺ともとけり。諸佛自利々他の願行、彌陀をもてあるじとして分身遣化の利生方便を、めぐらすこと揭焉。これによりて久遠實成の彌陀をもて、報身如來の本體とさだめて、これより應迹をたるゝ諸佛通總の法報應等の三身は、みな彌陀の化用たりといふこと

をしるべきものなり。〔口傳鈔〕

○汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。……我等(彌勒)は當に佛語を信受すべし。……汝等諦かに聽け、如來の秘密神通の力を。一切世間の天人。及び阿修羅は。皆今の釋迦牟尼佛。釋氏の宮を出でて。伽耶城を去ること遠からず。道場に坐して。阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり。然るに。善男子。我れ實に成佛してより已來。無量無邊。百千萬億。那由佗劫なり。〔法華經〕

增減の二見

○舍利弗。大邪見とは、謂はゆる、衆生界增すと見、衆生界減ずと見るなり。舍利弗。この大邪見の諸衆生等は、こゝを以ての故に生盲目なきに見る。この故に長夜に邪道を妄行す。この因緣を以て現在世に諸惡趣に墮す。舍利弗。大險難とは、謂はゆる、衆生界は增すと取り、妄執に堅著し、衆生界は減ずと取り、妄執に堅著するなり。舍利弗。この諸衆生は妄執に堅著するなり。この故に長夜に邪道を妄行す。この因緣を以て未來世に諸惡趣に墮す。〔不增不減經〕

○舍利弗。この二種の見は乃ちこれ無明諸惡の根本なり。謂はゆる涅槃始生には無因無緣を見る。忽然にして見有り。舍利弗。この二種の見は乃ち、これ極惡の根本、大患の法なり。舍利弗。この二見によつて一切の見を起す。この一切の見と、かの二見とは、相捨離せざるこ

と、猶ほし、羅網の如し。一切の見とは謂はゆる、若しくは內、若しくは外、若しくは麁、若しくは細、若しくは中の種々の諸見なり。謂はゆる、增見減見なり。舍利弗。この二種の見は一界に依止し、一界に同じ、一界を合す。一切の愚癡凡夫は彼の一界を如實知せざるが故に、彼の一界を如實見せざるが故に、極惡の大邪見を起して、衆生界は增すと謂ひ、衆生界は減ずと謂ふなり。〔不增不減經〕

○かくの如き等の人は、增減の見を起す。何を以ての故に。この諸衆生は如來の不了義經によつて、慧眼なきが故に。如實の空見を遠離するが故に。〔不增不減經〕

○舍利弗。一切愚癡凡夫は不如實知なり。一法界の故に。不如實見なり。一法界の故に。邪見の心を起し、衆生界は增し、衆生界は減ずと謂ふ。舍利弗。如來在世には我が諸弟子は此見を起さず。〔不增不減經〕

有無の二見

○解脫の光輪きはもなし、光觸かふるものはみな、有無をはなるとのべたまふ、平等覺に歸命せよ。〔淨土和讃〕

○麻糸の長し短しむづかしや有無の二つにいつかはなれん。〔蜷川の妻の歌〕

○法は住すべからず、若し法に住せば、是れ則ち法に住す、法を求むるに非ざるなり。法は見聞覺知すべからず。若し見聞覺知を行ぜば、是れ則ち見聞覺知なり、法を求むるに非ざるなり、法は無爲に名づく、若し有爲を行ぜば、是れ有爲を求む、法を求むるに非ざるなり。是の故に舍利弗、若し法を求むる者は、一切の法に於て、應に求むる所なかるべし。是の法を說くの時、五百の天子諸法の中に於て、法眼淨を得たり。〔維摩經〕

○選擇本願は、有念にあらず、無念にあらず。有念はすなはち色形をおもふにつきていふことなり。無念といふは、形をこゝろにかけず、色をこゝろにおもはずして、念もなきをいふなり。〔末燈鈔〕

○阿彌陀如來の選擇本願念佛は有念の義にもあらず、無念の義にもあらずとまふしさふらふなり。いかなる人まふしさふらふとも、ゆめ〳〵もちゐさせたまふべからずさふらふ。〔親鸞聖人御消息集〕

○常陸國中の念佛者のなかに、有念無念の念佛沙汰の、きこえさふらふは、ひがごとにさふらふと、まふしさふらひにき。たゞ詮ずるところは、他力のやうは、行者の、はからひにてはあらずさふらへば、有念にあらず、無念にあらずとまふすことを、あしうきゝなして、有念無念なんど、ま

ふしさふらひけると、おぼえさふらふ。彌陀の選擇本願は、行者のはからひの、さふらはねばこそ、ひとへに他力とは、まふすことにてさふらへ。〔親鸞聖人御消息集〕

○世尊は言へり、大慧よ、こゝに一類の外道あり。無に著せる外道の見を有し、分別思慮の因盡きたる自性の無より、兎角のあること無きが如く一切諸法も亦是の如しと分別す。復大慧よ、他の外道有り。大種、求那、塵等の諸佛の形量差別を見て兎角の執すべき執なし、牛角はありと分別す。大慧よ、彼等は二見に墮して唯心を了せず。彼等は自心界分別によりて增長す。大慧よ、身、資財、器世間は唯分別なるが故に有無を離れたる兎角は分別すべからず。大慧よ、是の如く一切諸法は有無を離れたり。分別せらるべきにあらず。〔入楞伽經〕

○是の如く無量の諸有情をも滅度せしめて、滅度せしめられたる或る有情もあることなし。〔能斷金剛般若波羅密多經〕

○一者自在の義菩薩衆生を度す。譬へば獅子の鹿を搏に、所爲難ざるが如きは、遊戯するが如似し。二者は度無所度の義なり。菩薩衆生を觀ずるに畢竟じて有ゆる所無し。無量の衆生を度すと雖も、而て實に一衆生として滅度を得る者無し。衆生を度さんと示すこと遊戯するが如似し。〔往生論註〕

○有佛のところ住まるを得ざれ、無佛のところ急に走過せよ。〔趙州和尙〕

○年毎に咲くや吉野の櫻花木を割りて見よ花のあるかは。〔古歌〕

立枯（小乘）

○答て曰く、若し無爲を見て、正位に入る者は復、阿耨多羅三藐三菩提心を發すこと能はず。譬へば高原陸地に蓮華を生ぜず、卑濕汚泥に乃ち此の華を生ずるが如し。是の如く無爲の法を見て、正位に入る者は終に復、能く佛法を生ぜず、煩惱の泥中に乃ち衆生有て、佛法を起す耳、又種を空に植うれば終に生ずること能はず、糞壤の地に乃ち能く滋茂するが如し。是の如く無爲の正位に入る者は、佛法を生ぜず、我見を起すこと須彌山（Sumeru）の如くなるも、猶能く、阿耨多羅三藐三菩提心を發して、佛法を生ず。是の故に當に知るべし。一切の煩惱を、如來の種と爲すこと。〔維摩經〕

○兵を用ふるの神妙は虛無に墮ちざるなり。〔鬪戰經〕

應病與藥、以毒制毒

○卒爾に觀ずして說くことを得ざれ。何を以ての故に。薄福の衆生は聞いて信を生ぜず、罪を得ること無量なるが故に。〔大薩遮尼乾子所說經〕

○佛及び菩薩を大醫と爲す故に善知識と名づく。何を以ての故に。病を知り藥を知り病に應じて藥を授くるが故に。〔涅槃經〕

○衆生の心を察し、その志性に從ひ、萎靡して隨ふ。病に應じ藥を與ふ等、無上正眞道慧を授く。〔文殊悔過經〕

○諸如來法輪を轉じ、四失を遠離す。一は非處なく、二は非時なく、三は非器なく、四は非法なく、病に應じて藥を與へ、復除くを得しむ。〔心地觀經卷二〕

○氷上に火を燃やすに、火猛にして即ち氷解く、氷解ければ則ち火滅するが如し。彼の下品人は法性無生を知らずと雖も但佛名を稱ふる力を以て往生の意を作し、彼土に生ぜんと願ず。彼土は是れ無生界、見生の火自然に而滅す。〔往生論註〕

○金が欲しさに命をすてゝ捨てゝ見たれば金いらず。〔盤硅禪師〕

○火中に蓮華を生ずる、是れ希有と謂ふべし。欲に在りて禪を行ず、希有亦是の如し。〔維摩經〕

肯定否定

○知を以て佛を取るを、佛を知ると曰はず。不知を以て佛を取るも、佛を知るに非ず。非知、非不知を以て佛を取るも、亦佛を知るに非ず。非々知、非々不知を以て佛を取るも、亦佛を知るにあ

らず。佛智はこの四句を離れたり。〔略論安樂淨土義〕

○心に因り氣に因る者は未だなり。心に因らず氣に因らざる者も未だなり。知ること知にあらず、慮ること慮にあらず。竊に識つて骨を化す。骨を化して識る矣。〔鬪戰經〕

招喚の勅命

○こゝをもて歸命は本願招喚の勅命なり。發願廻向といふは、如來すでに發願して衆生の行を廻施したまふの心なり。卽是其行といふは、すなはち選擇本願これなり。必得往生といふは、不退のくらゐに至ることを得ることをあらはす。經には卽得といへり。釋には必定といへり。卽の言は願力をきくによりて報土の眞因決定する時剋の極促を光闡するなり。必の言は審なり、然なり、分極なり。金剛心成就のかほばせなり。〔敎行信證〕

無明煩惱

○爾れば如來の眞說宗師の釋義明かに知りぬ。安養淨刹は眞の報土なることを顯はす。惑染の衆生此に於て性を見ることを能はず。煩惱に覆る所、故に經には我れ十住の菩薩少分佛性を見ると說くと言へり。故に知りぬ。安樂佛國に到れば即ち必ず佛性を顯はす。本願力の廻向に由るが故に。亦經には衆生未來淸淨之身を具足莊嚴して、而して佛性を見るを得る。〔敎行信證〕

○しからば無明煩惱を具して、安養淨土に往生すれば、すなはち無上佛果にいたると、釋迦如來ときたまへり。〔末燈鈔〕

○おほよそ惡業煩惱を斷じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にほこるおもひもなくて、よかるべきに、煩惱を斷じなば、すなはち佛なり、佛のためには、五劫思惟の願、その詮なくやましまさん。本願ぼこりと、いましめらるゝひと〴〵も、煩惱不淨具足せられてこそさふらうげなればそれは願にほこらるゝにあらずや。いかなる惡を本願ぼこりといふ、いかなる惡か、ほこらぬにてさふらうべきぞや。かへりてこゝろをさなきことか。〔歎異鈔〕

眞宗の正意

○茲に因て今眞佛眞土を顯す。斯れ乃ち眞宗の正意也。經家論家の正說、淨土宗師の解義、仰で敬信す可し。〔敎行信證〕

○是を以て論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依り、久しく萬行諸善之假門を出で永く雙樹林下の往生を離れ、善本德本の眞門に廻入して、偏へに難思往生之心を發しき、然るに今特に方便の眞門を出で、選擇の願海に轉入せり。速かに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲す。果遂の誓、良に由ある哉。爰に久しく願海に入りて深く佛恩を知り至德を報謝せんが爲に、眞宗の簡要を撫ふて恒常に不可思議德海を稱念し、彌〳〵斯を喜愛し、特に斯を頂戴する也。〔敎行信證〕

○慶ばしき哉。心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如來の矜哀を知りて、良に師敎の恩厚を仰ぐ。慶喜彌至り、至孝彌重し。茲に因りて眞宗の銓を鈔し、淨土の要を撫ふ。唯佛恩の深きを念ふて人倫の嘲りを恥じず。若斯書を見聞せむ者、信順を因となし、疑謗を緣と爲して、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顯はさむ矣。〔敎行信證〕

○橫超とは本願を憶念して自力の心を離る。專修とは、唯佛名を稱念して自力の心を離る。是を橫超他力と名くる也。斯れ即ち專の中の專、頓の中の頓、眞の中の眞、乘の中の一乘なり。斯乃ち眞宗なり。已に眞實行の中に顯はし畢ぬ。〔敎行信證〕

身口意の三業

○一闡提(icchantika)輩に善法有りとは、是の義然らず。何を以ての故に、一闡提の輩は若し身業口業、意業、取業、求業、施業、解業あるも、是くの如き等の業、盡く是れ邪業なり。何を以ての故に。因果を求めざるが故に、善男子、訶梨勒〔(karia)學名Capparis aphilla〕の果、根、枝、葉、花、實、悉く苦きが如く、一闡提の亦復此くの如し。〔涅槃經〕

○上善菩薩曰く、身、口、意業を二と爲す。是の三業皆作相無し。身に作相無ければ即ち口に作

相なし。口に作相なければ、即ち意にも作相無し。是の三業作相無ければ、即ち一切法にも作相なし。能く是の如く無作の慧に隨ふ者、是を不二法門に入ると爲す。〔維摩經〕

○四十八願成就して、正覺の阿彌陀となりたまふ、たのみをかけしひとはみな、往生かならずさだまりぬ。極樂無爲の報土には、雜行むまるゝことかたし、如來要法をえらんでは、專修の行をおしへしむ。兆載永劫の修行は、阿彌陀の三字におさまれり、五劫思惟の名號は、五濁のわれらに付屬せり。阿彌陀如來の三業は、念佛行者の三業と、彼此金剛の心なれば定聚のくらゐにさだまりぬ。多聞淨戒えらばれず、破戒罪業きらはれず、たゞよく念ずるひとのみぞ、瓦礫も金と變じける。〔帖外和讃〕

○一切衆生、身口意業の所修の解行、必ず眞實心の中に作したまへるを須ひんことを明かさんと欲ふ。外に賢善精進の相を現はすことを得ざれ、內に虛假を懷ければなり。……此の雜毒の行を廻して彼の佛の淨土に求生せんと欲する者は、此れ必ず不可なり。何を以ての故に、正しく彼の阿彌陀佛因中に菩薩の行を行じ、時乃至一念一刹那も三業の所修皆是れ眞實心の中に作したまへるに由るなり。〔散善義〕

○たとひ諸門こぞりて、念佛はかひなき人のためなり、その宗あさし、いやしといふとも、さらにあらそはずして、われらがごとく、下根の凡夫、一文不通のものゝ、信ずればたすかるよし、うけたまはりて信じさふらへば、さらに上根のひとのためには、いやしくとも、われらがためには最上の法にてまします。たとひ自餘の教法は、すぐれたりとも、みづからがためには、器量およばざれば、つとめがたし、われもひとも生死を、はなれんことこそ、諸佛の御本意にて、おはしませば、御さまたげあるべからずとて、にくひ氣せずば、たれのひとかありて、あだをすべきや。かつは諍論のところには、もろ〳〵の煩惱おこる、智者遠離すべきよしの、證文さふらうにこそ。故聖人のおほせには、この法をば信ずる衆生もあり、そしる衆生もあるべしと、佛ときをかせ、たまひたることなれば、われはすでに信じたてまつる、またひとありて、そしるにて、佛說まことなりけりと、しられさふらう、しかれば往生は、いよ〳〵一定と、おもひたまふべきなり、あやまて、そしるひとのさふらはざらんにこそ、いかに信ずるひとはあれども、そしるひとのなきやらんとも、おぼへさふらひぬべけれ。かくまふせばとて、かならずひとに、そしられんとにはあらず、佛のかねて信誘ともに、あるべきむねをしろしめして、ひとのうたがひをあらせじと、ときをかせたまふことを、まふすなりとこそさふらひしか。〔歎異鈔〕

○わが宗こそ、すぐれたれ、ひとの宗は、おとりたりといふほどに、法敵もいできたり、謗法もおこるなり。これしかしながら、みづからわが法を破謗するにあらずや。〔歎異鈔〕

（三）

過　現　當（三世）

○彌勒、世尊仁者に記を授く。一生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと。何れの生を用て受記を得となす、過去なりや、未來なりや、現在なりや。若し過去の生ならば過去の生は已に滅す。若し未來の生ならば、未生の生は未だ至らず。若し現在の生ならば、現在の生は住することなし。佛の所說の如く。比丘、汝今即時に、亦生じ、亦老し、亦滅すと。若し無生を以て受記を得ば、無生は即ち是れ正位なり。正位の中に於て、亦受記なし。亦阿耨多羅三藐三菩提を得ることなし。云何ぞ彌勒一生の記を受くるや。〔維摩經〕

○已今當の往生はにむまる、こむしやう　この土の衆生のみならず、十方佛土よりきたる、無量無數不可計なり。〔淨土和讃〕

○本あり、今なし。本なく、今あり。三世の有法、この處あることなし。〔涅槃經〕

○迦葉言く、薩遮善男子。無量無邊の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、已に阿耨多羅三藐三菩提を成じ、當に阿耨多羅三藐三菩提を成じ、現に阿耨多羅三藐三菩提を成せざるべし。〔大薩遮尼乾子所說經〕

○今といふ今なる時はなかりけり、まの時來ればいの時は去る。〔讀人しらず〕

唯佛與佛

○安養淨土の莊嚴は、唯佛與佛の知見なり、究竟せること虛空にして、廣大にして邊際なし。〔高僧和讃〕

王法爲本

○まづ王法をもて本とし、仁義をさきとして世間通途の儀に順じて。〔御文章第三帖〕

○王法は額にあてよ、佛法は內心に深く蓄へよとの仰に候。仁義と云事も端正あるべきことなるよしに候。〔蓮如上人御一代記聞書〕

○汝今諸天人民及び後世の人、佛の經語を得て、當に熟之を思ひて、能く其中に於て、心を端し行を正くすべし。主上善を爲して、其下を率化し、轉相勅令して、各自ら端しく守るべし。聖を尊み善を敬ひ、仁慈博愛にして、佛語の敎誨敢て虧負することなし。〔大無量壽經〕

○大聖世尊よ、この金光明最勝帝王經は未來世、聚落、城市、都邑、鄙野、王國、首府に於て流布すべし。人王の國土に達すべし。大聖世尊よ、如何なる人王も、かの天帝敎訓なる王論によりて王道をなすべし。……世尊諸の國中に於て人王たるものは、若し正法なくば國を治め衆生を安穩し自身これが正位にあらしむる能はず。〔金光明最勝王經〕

○世尊よ、吾等四大王は正法を語る法王なり、大聖世尊よ、吾等は天、龍、藥叉、健闥婆、阿蘇羅、揭路荼、緊那羅、莫呼路伽をして正法によりて王道をなさしむべし。……吾等四大王はかの人王を一切の王よりも一層款待せられ、敬重せられ、尊敬供養せられ、一切國土に於て稱揚せらるべきものとなすべし。〔金光明最勝王經〕

○善哉、善哉、吾等の大王よ。是の如き汝等は過去の勝者に供養をなし、善根を種ゑたる多俱胝尼瘦多百千の諸佛に承事し、正法を遵奉し、正法を語り、正法を以て諸天及び諸人に對して王道をなさしめよ。〔金光明最勝王經〕

○功德を以て自ら嚴飾せられたる彼は正法の勤めをなすべし。恒に罪過を捨てたる彼は恒に歡喜して奉侍す。正法を以て王國を守護し、正法に於て統治すべし。諸有情を善行に留まらしめ、惡作を轉ぜしむべし。王國に於て豐饒あり王は正法を具足すべし。罪過を作るものには宜に應じて調御をなすべし。王は聞譽を得、安らけく諸民を守護すべしと。〔金光明最勝王經〕

○あゝ弘誓の强緣は多生にもまうあひがたく、眞實の淨信は億劫にもえがたし。たま〳〵行信をえばとをく宿緣をよろこべ。もしまたこのたび疑網に覆蔽せられなば、かへりてまた曠劫を逕歷せん。まことなるかな攝取不捨の眞言、超世希有の正法、聞思して遲慮することなかれ。〔敎行信證〕

○世尊。大寶出づとは、眞實に正法を攝受するに名づく。世尊。正法を攝受すると云ふは、正法に異るなきを謂ふ。異るなく正法を攝受するなり。正法とは卽ちこれ正法を攝受するなり。世尊。波羅密に異るなし。正法を攝受するに異るなし。正法を攝受するとは卽ちこれ波羅密なり。〔勝鬘經〕

現世利益

○阿彌陀如來來化して、息災延命のためにとて、金光明の壽量品、ときおきたまへるみのりなり。……南無阿彌陀佛をとなふれば、この世の利益きはもなし、流轉輪廻のつみきへて、定業中夭のぞこりぬ。〔淨土和讃〕

○半滿權實之法門に入ると雖も、眞なる者は甚以て希なり。僞なる者は甚以て多く、虛なる者は甚以て滋し、是を以て釋迦牟尼佛は福德藏を顯說して群生海を

誘引し、阿彌陀如來は本と誓願を發て、普く諸有海を化して既に悲願有す、修諸功德之願と名く。〔敎行信證〕

○佛の遊履する所の國邑、丘聚、化を蒙らざるはなし。天下和順し、日月清明にして、風雨時を以てし、災厲起らず、國豊かに民安くして、兵戈用ゆることなし、德を崇び仁を興して、務めて禮讓を修む。〔大無量壽經〕

不生不滅

○舍利弗。この法身は、これ不生不滅の法なり。過去際にあらず、未來際にあらず。二邊を離るゝが故に。舍利弗。過去際にあらざるは生時を離るゝが故に。未來際にあらざるは滅時を離るゝが故に。舍利弗。如來の法身は常なり。不異法を以ての故に。不盡法を以ての故に。舍利弗。如來の法身は恒なり。常に歸依すべきが故に。未來際平等なるを以ての故に。舍利弗。如來の法身は清涼なり。不二法を以ての故に。無分別法を以ての故に。舍利弗。如來の法身は不變なり。滅法にあらざるを以ての故に。作法にあらざるを以ての故に。〔不增不減經〕

御聖敎

○蓮如上人仰せられ候。本尊は掛やぶれ、聖敎はよみやぶれと、對句に仰せられ候。〔蓮如上人御

一代記聞書〕

○故聖人の御こゝろに、あひかなひて、御もちゐさふらう、御聖敎どもを、よく〳〵御覽さふらうべし。おほよそ聖敎には、眞實權假ともに、あひまじはりさふらうなり。權をすて實をとり、假をさしおきて眞をもちゐるこそ、聖人の御本意にてはさふらへ。かまへて〳〵、聖敎をよみ、みだらせたまふまじくさふらう。〔歎異鈔〕

如來廻向の信心

○本願成就の文、經にいはく、あらゆる衆生、その名號をきゝて、信心歡喜せんこと乃至一念せん。至心に廻向したまへり。彼國に生ぜんと願ずれば、すなはち往生をえ、不退轉に住す。たゞし五逆と誹謗正法とをばのぞく。〔敎行信證〕

○法然聖人のおほせには、源空が信心も如來よりたまはりたる信心なり。善信房の信心も、如來よりたまはらせたまひたる信心なり、さればたゞひとつなり。〔歎異鈔〕

意により語によらず

○法に依つて人に依らず、義に依つて語に依らず、知に依つて識に依らず、了義經に依つて不了義經に依らず。〔涅槃經〕

野狐禪

○唐の洪水百丈山の大智懐海禪師と野狐との商量「百丈上堂、常に一老人ありて法を聽きて衆に隨つて散じ去る。一日去らず、丈乃ち問ふ、前に立つ者は何人ぞ。老人云く、某甲、過去迦葉佛の時に於て曾て此山に住す、學人ありて問ふ。大修行底の人還つて因果に落するや、また無きやと。某甲他に答へて道ふ、不落因果と。後五百生野狐身に墮す。今請ふ和尚某甲に代りて一轉語を下し、野狐身を脱せしめよ。丈曰く、不昧因果と。老人言下に於て大悟し禮拜して曰く、某甲既に野狐身を脱して遂に山後に住在せん、亡僧の事例に依れと。」〔傳燈録六、會元三〕

義なきを義とす

○念佛には、無義をもて義とす、不可稱不可說不可思議のゆへにとおほせさふらひき。〔歎異鈔〕

○如來の御ちかひなれば、他力には義なきを義とすと、聖人のおほせごとにてありき。義といふことは、はからふことばなり。行者のはからひは自力なれば、義といふなり。他力は本願を信樂して、往生必定なるゆへに、さらに義なしとなり。しかればわがみのわるければ、いかでか如來むかへたまはんとおもふべからず。凡夫はもとより煩惱具足したるゆへに、わるきものとおもふべし。またわがこゝろよければ往生すべしとおもふべからず。自力の御はからひにては、眞實の報土へむ

まるべからざるなり。行者のをの〳〵の自力のはからひにては、懈慢邊地の往生、胎生疑城の淨土までぞ、往生せらるゝことにてあるべきとぞ、うけたまはりたりし。〔末燈鈔〕

○かたちましますときは無上涅槃とは申さず。かたちもましまさぬやうをしらせんとてはじめて彌陀佛とまうすぞときゝならひてさふらふ。彌陀佛は、自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこゝろえつるのちには、この自然のことは、つねにさだすべきにあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすといふことは、なを義のあるになるべし。これは佛智の不思議にてあるなり。〔末燈鈔〕

○拂ふべきちりもあらぬに其箒もつは心に塵のありてか。

はらふべきちりもあらぬといふちりをはらはんための箒なりけり。〔寒山拾得の圖に題す。讀人知らず〕

○また彌陀の本願を信じさうらひぬるうへには、義なきを義とすとこそ、大師聖人の、おほせにてさふらへ。かやうに義のさふらふらんかぎりは、他力にはあらず自力なりと、きこへてさふらふ。また他力とまふすは、佛智不思議にてさふらふなるときに、煩惱具足の凡夫の無上覺のさとりを、えさせさふらふなることをば。佛と佛のみ御はからひなり。さらに行者の、はからひにあらずさふ

らふ。しかれば義なきを義とすとさふらふなり。義とまふすことは、自力のひとのはからひをまふすなり。他力には、しかれば義なきを義とすとさふらふなり。〔親鸞聖人御消息集〕

他力本願

○當時は後世者ぶりして、よからんものばかり念佛まふすべきやうにおもひ、あるひは道場にはりぶみをして、なんなんのことしたらんものをば道場へいるべからず、なんどいふことひとへに賢善精進の相を、ほかにしめして、うちには虛假をいだけるものか。願にほこりて。つくらんつみも、宿業のもよほすゆへなり。さればよきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいらすればこそ他力にてはさふらへ。〔歎異鈔〕

欲生願求

○欲生と言ふは、即是如來諸有群生を招喚し玉ふ勅命なり。〔教行信證〕

三業惑亂

○三業惑亂、眞宗本願寺派に於て第七世能化智洞が三業歸命の異安心を唱へて宗意を惑亂せし爲め、寛政、享和、文化に亘り約十年間一派の上下に通じて大擾亂ありしを云ふ。〔佛教大辭彙第三卷一五六五頁に詳かなり〕

南無阿彌陀佛

○唱ふれば佛もわれもなかりけり南無阿彌陀佛の聲のみぞして〔一遍上人〕

唱ふれば佛もわれもなかりけり南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛〔法堂國師〕

生死即涅槃

○天親菩薩の論を註解して、報土因果は誓願なりと顯はしたまふ。往還の廻向は他力による。正定の因は唯信心なり。惑染の凡夫信心發しぬれば、生死即ち涅槃なりと證知せしむ。必ず無量光明土に至れば、諸有の衆生皆普く化すといへり。〔正信偈〕

○何をか不二相と云ふ。謂く、大慧よ、影、光、長短、黑白の如くに相對するものあり。異々にあらず。是の如く大慧よ、生死涅槃の如く諸法は不二なり。大慧よ、涅槃のあるところ其處に生死あらず。又生死のあるところ其處に涅槃あることなし、相因有性を離るゝが故に。故に生死涅槃の如く一切諸法は不二と名けらる。是故に、今大慧よ、空不生不二無自性に於て修行すべし。〔入楞伽經〕

○云何んが諸菩薩は菩提の正行を行じ、生死涅槃を離る。自他を饒益するが故に。……五蘊と法界は一ならず異ならず。……因緣生を須ひずして、無因緣生にあらざるなり。〔金光

明最勝王經〕

他力のなかの自力

○他力のなかには自力とまふすことさふらふときゝ候ひき。他力のなかにまた他力とまふすことはきゝ候はず。他力のなかに自力とまふすことは、雑行雑修、定心念佛をこゝろかけられて候人々は、他力のなかの自力のひとゞ〳〵なり。他力のなかには、また、他力とまふすことは、うけたまはり候はず。なにごとも専信房のしばらくもゐたらんと候へば、そのとき申候べし、穴賢々々。〔末燈鈔〕

○つぎにみづからの、はからひをさしはさみて善悪ふたつにつきて、往生のたすけさはり、二様におもふは、誓願の不思議をばたのまずして、わがこゝろに往生の業をはげみて、まふすところの念佛をも、自行になすなり。このひとは名號の不思議をも、また信ぜざるなり。信ぜざれども邊地懈慢疑城胎宮にも往生して、果遂の願のゆへに、つゐに報土に生ずるは、名號不思議のちからなり。これすなはち誓願不思議のゆへなればたゞひとつなるべし。〔歎異鈔〕

涅槃

○善男子よ、大樂有り。故に大涅槃と名づく。涅槃は無樂なり。四樂を以ての故に大涅槃と名く。何等か四と爲する。一者諸樂を斷づるが故に、樂を斷ぜざる者は則ち名けて苦となす。若し苦有る者は大樂と名けず。樂を斷ずるを以ての故に。則ち苦有ること無し。無苦無樂を乃ち大樂と名く。涅槃之性は無苦無樂なり。是故に涅槃を名けて大樂と爲す。二者大寂靜の故に名けて大樂と爲す。涅槃之性是大寂靜なり。何を以ての故に。一切慣鬧の法を遠離せる故に。大寂を以ての故に大涅槃と名く。三者一切智の故に名けて大樂と爲す。一切智に非ざるを大樂と名けず。諸佛如來は一切知の故に名けて大樂と爲す。大樂を以ての故に大涅槃と名く。四者身不壞の故に名けて大樂と爲す。身若し壞る可きは則ち樂と名けず。如來之身は金剛にして壞る無し。煩惱之身、無常之身に非ざる故に大樂と名く。大樂を以ての故に大涅槃と名く。〔涅槃經〕

○生死の家には、疑を以て所止となし、涅槃の城には、信を以て能入と爲す。〔法然上人選擇集〕

親鸞一人がためなり

○聖人のつねのおほせには彌陀の五劫思惟の願を、よくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと、おぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、御述懐さふらひしことを。〔歎異鈔〕

聖徳太子

○救世觀音大菩薩、聖德皇と示現して、多々のごとくすてずして、阿摩のごとくにそひたまふ、……聖德皇のあはれみて、佛智不思議の請願に、すゝめいれしめたまひてぞ、住正定聚の身となれる、……聖德皇のおあはれみに、護持養育たえずして、如來二種の廻向に、すゝめいれしめおはします。〔正像末和讃〕

卅五　願（非男非女）

○設ひ我佛を得んに、十方無量不可思議の諸佛世界に、其女人ありて我が名字を聞きて歡喜信樂して菩提心を發し、女身を厭惡し、壽終の後、復女像とならば正覺を取らじ。〔大無量壽經〕

○即時に天女、神通力を以て、舍利弗を變じて天女の如くならしむ。天自から身を化して、舍利弗の如くして問ふて曰く、何を以て女身を轉せざる。舍利弗天女の像を以て答て曰く、我れ今轉ずる所を知らずして變じて女身となる。天曰く、舍利弗、若し能く此女身を轉せば、則ち一切の女人も亦當に能く轉ずべし。舍利弗の女に非ずして而も女身を現ずる如く、一切の女人も亦復是の如し女身を現ずと雖も而も女に非ざるなり、是の故に、佛一切の諸法は男に非ず女に非ずと說く。〔維摩經〕

輪廻流轉

○一は信心不淳にして若存若亡す。二は信心不一にして決定なし。三は信心不相續にして餘念間るが故なり。此の三句は展轉相成す。〔往生論註〕

○往相還相の廻向に、まうあはぬ身となりにせば、流轉輪廻もきはもなし、苦海の沈淪いかゞせん。〔正像末和讃〕

○本師の源空は佛敎に明かにして。善惡の凡夫人を憐愍し。眞宗の敎證を片州に興し。選擇本願を惡世に弘めたまふ。生死輪轉の家に還來ることは。決するに疑情を以て所止となす。速かに寂靜無爲の樂に入ることは。必ず信心を以て能入と爲すといへり。〔正信偈〕

自力のはからひ（妄分別）

○攝取のうへには、ともかくも行者のはからひあるべからず候。淨土へ往生するまでは、不退のくらゐにておはしまし候へば、正定聚のくらゐとなづけておはしますことにて候なり。まことの信心をば、釋迦如來、彌陀如來二尊の御はからひにて、發起せしめたまひ候とみえて候へば、信心のさだまるときまふすは、攝取にあづかるときにて候なり。そののちは正定聚のくらゐにて、まことに淨土へむまるゝまでは候べしとみえ候なり。ともかくも行者のはからひ、ちりばかりもあるべから

す候へばこそ、他力とまふす事にて候へ。あなかしこ〳〵。〔末燈鈔〕

○世尊は告げて言へり、楞伽王よ、汝は瓶等の自身敗壞すべき、消滅すべき法なるを見ざるや。愚夫の分別境界によりて差別あり。是の如くこゝに亦何ものか捉へられざる。法と非法の中に愚夫の分別によりて差別あり。されど聖智は(この)見によりて得られず。……楞伽王よ、妄分別相あるが故に法と非法の差別あり。〔入楞伽經〕

○分別に由るが故に二に取著す。〔入楞伽經〕

拔苦與樂

○苦を拔くを慈と曰ひ、樂を與ふるを悲と曰ふ。慈に依るが故に一切衆生の苦を拔き、悲に依るが故に無安衆生心を遠離せり。〔往生論註〕

○兵の本は禍患を杜ぐに在り矣。〔鬪戰經〕

菩薩行

○信もなくて、人に信をとられよ〳〵と申すは、我は物をもたずして、人に物をとらすべきといふの心なり。人承引あるべからずと、前住上人申さると、順誓に仰られ候き。自信敎人信と候時はまづ我が信心決定して、人にも敎て佛恩になるとのことに候。自身の安心決定して敎るは、すなはち大悲傳普化の道理なる由、同く仰られ候。〔蓮如上人御一代記聞書〕

○鸞聖人、東國に御經廻のとき、御風氣とて三日三夜ひきかつぎて、水漿不通しましますことありき。つねのときのごとく、御腰膝をうたせらるゝこともなし。御煎物などいふこともなし。御看病のひとをちかくよせらるゝこともなし。三箇日とまふすとき、噫いまはさてあらんと、おほせごとありて、御起居御平復もとのごとし。そのとき惠信の御房男女六人君達の御母儀たづねまふされていはく、御風氣とて兩三日御寢のところに、いまはさてあらんと、おほせごとあること、なにごとぞやと。聖人しめしましましてのたまはく、われこの三箇年のあひだ、淨土の三部經をよむことをこたらず、おなじくは千部よまばやとおもひて、これをはじむるところに、またおもふやう、自信敎人信、難中轉更難とみえたれば、みづからも信じ、ひとをゝしへても信ぜしむるほかは、なにのつとめかあらんに、この三部經の部數をつむこと、われながらこゝろえられずと、おもひなりて、このことをよく〳〵案じさだめん料に、そのあひだは、ひきかつぎてふしぬ。つねのやまひにあらざるほどに、いまはさてあらんといひつるなりと、おほせごとありき。わたくしにいはく、つら〳〵このことを案ずるに、ひとの夢想のつげのごとく、觀音の垂迹として、一向專念の一義を、御弘通あると揭焉なり。〔口傳鈔〕

○此の無上菩提心は卽ち是れ願作佛心なり。願作佛心は卽ち是れ度衆生心なり。度衆生心は卽ち衆生を攝取して、有佛の國土に生せしむる心なり。是の故に彼の安樂淨土に生せんと願ずる者は無上菩提心を發するを要する也。若し人無上菩提心を發せずして、但彼の國土の受樂無間なるを聞て樂の爲の故に、生せんと願ずるは亦當に往生を得ざるべき也。〔往生論註〕

○詮するところ愚身が信心におきては、かくのごとし。このうへは、念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと。〔歎異鈔〕

○慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐゝむなり。しかれども、おもふがごとく、たすけとぐること、きはめてありがたし。また淨土の慈悲といふは、念佛して、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく、衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとをし、不便とおもふとも、存知のごとく、たすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念佛まふすのみぞ、すゑとをりたる大慈悲心にてさふらうべきと。〔歎異鈔〕

○親鸞は、父母の孝養のためとて、一遍にても念佛まふしたること、いまださふらはず。そのゆへは、一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれも〳〵、この順次生に佛になりてたすけさふらうべきなり。わがちからにて、はげむ善にてもさふらはゞこそ、念佛を廻向して父母をもたすけさふらはめ、たゞ自力をすてゝ、いそぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだいづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと。〔歎異鈔〕

不斷煩惱得涅槃

○如來の世に興出したまふ所以は、唯だ彌陀の本願海を說かんとなり。五濁惡時の群生海、應に如來如實の言を信ずべし。能く一念喜愛の心を發せば、煩惱を斷ぜずして涅槃を得べし。凡・聖・逆・謗齊しく廻入すれば、衆水の海に入りて一味なるが如し。〔正信偈〕

（五）

地獄一定

○たとひ法然上人に、すかされまひらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう。そのゆへは。自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が念佛を申して地獄にも、おちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ、後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。〔歎異鈔〕

○善導獨り佛の正意を明かにし。定散と逆惡とを矜哀して、光明・名號は因緣なりと顯はしたまふ。本願の大智海に開入すれば、行者正しく金剛心を受け、慶喜一念相應の後、韋提と等しく三忍を獲。即ち法性の常樂を證せしむといへり。〔正信偈〕

○寶號經にのたまはく、彌陀の本願は、行にあらず、善にあらず、たゞ佛名をたもつなり。名號はこれ善なり、行なり。行といふは、善をするについていふことばなり。本願はもとより佛の御約束とこゝろえぬるには、善にあらず、行にあらざるなり。かるがゆへに他力とまふすなり。本願の名號は、能生する因なり。能生の因といふは、すなはちこれ父なり。大悲の光明は、これ所生の緣なり。所生の緣といふは、すなはちこれ母なり。〔末燈鈔〕

一心一念

○正直の心にして邪僞まじはることなし。まことにしんぬ疑蓋間雜なきがゆへに、これを信樂となづく。信樂はすなはちこれ一心なり。一心すなはちこれ眞實信心なり。このゆへに論主建に一心といへる也。しるべし。〔教行信證〕

○十方の衆生に廻向すればとて、二念三念せんは、往生にあしきことゝ、おぼしめされさふらはゞ、ひがごとにてさふらふべし。念佛往生の本願とこそ、おほせられてさふらへば、おほくまふさんも、一念一稱も、往生すべしとこそ、うけたまはりてさふらへ、かならず一念ばかりにて、往生すといひて、多念をせんは往生すまじきとまふすことは、ゆめゆめあるまじきことなり、唯信鈔をよく〳〵御覽さふらふべし。〔親鸞聖人御消息集〕

○誓願をはなれたる名號も候はず、名號をはなれたる誓願も候はず候。かく申候もはからひにて候なり。たゞ誓願を不思議と信じ、また名號を不思議と一念信じとなへつるうへは、何條わがはからひをいたすべき。きゝわけ、しりわくるなど、わづらはしくはおほせられさふらふやらん。これみなひがごとにて候なり。たゞ不思議と信じつるうへは、とかく御はからひあるべからず候。往生の業には、わたくしのはからひはあるまじく候なり。〔末燈鈔〕

○移るとも月も思はず寫すとも水もおもはぬ廣澤の池。〔古歌〕

一向專修

○安樂淨土にいりはつれば、すなはち大涅槃をさとるとも、また無上覺をさとるとも、滅度にいたるともまふせば、御名こそかはりたるやうなれども、これみな法身と申佛のさとりをひらくべき正因に、彌陀佛の御ちかひを、法藏菩薩われらに廻向したまへるを、往相の廻向とまふすなり。この廻向をせさせたまへる願を、念佛往生の願とは申なり。この念佛往生の願を一向に、信じてふたご

ゝろなきを、一向専修とは申なり。如來二種の廻向とまふすことは、この二種の廻向の願を信じ、ふたごゝろなきを、眞實の信心とまふす。この眞實の信心のおこることは、釋迦彌陀の二尊の御はからひよりおこりたりとしらせたまふべし。穴賢々々。〔末燈鈔〕

○一向專修のひとにおいて、廻心といふこと、たゞひとたびあるべし。その廻心とは、日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこゝろにては、往生かなふべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて、本願をたのみまひらするをこそ、廻心とはまふしさふらへ。〔歎異鈔〕

信心歡喜

○信心歡喜乃至一念といふは、信心は如來の御ちかひをきゝてうたがふこゝろのなきなり。歡喜といふは、歡はみをよろこばしむるなり、喜はこゝろによろこばしむるなり。うべきことをえてむずとかねてさきよりよろこぶこゝろなり。乃至は、おほきをもすくなきをも、ひさしきをもちかきをも、さきをものちをも、みなかねおさむることばなり。一念といふは、信心をうるときのきはまりをあらはすことばなり。〔一念多念證文〕

○經に聞と言ふは衆生佛願の生起本末を聞て疑心有ること無し。是を聞と言ふ也。信心と言ふは則本願力廻向之信心也。歡喜と言ふは身心悅豫を形はせる貌也。乃至と言ふは多少の言を攝する也。一念と言ふは信心二心なきが故に一念と言ふ。是を一心と名く。一念は則清淨報土の眞因也。〔教行信證〕

○うれしさを、むかしはそでにつゝみけり、こよひは身にもあまりぬるかな。〔御文一帖目〕

光明

○彌陀成佛のこのかたは、いまに十劫をへたまへり、法身の光輪きはもなく、世の盲冥をてらすなり、智慧の光明はかりなし、有量の諸相ことゞくく、光曉かぶらぬものはなし、眞實明に歸命せよ。〔淨土和讃〕

虛空

○一乘海と言ふ者一乘者大乘なり。大乘は佛乘なり。一乘を得る者阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。阿耨多羅とは卽是涅槃界なり。涅槃界とは卽是究竟法身なり。……敬んで往生人等に白さく、弘誓一乘海者無碍無邊最勝深妙不可說不可稱不可思議の至德を成就し玉へり。何を以ての故に。誓願不可思議なるが故に。悲願は喩へば大虛空の如し。諸々の妙功德廣大無邊なるが故に。〔教行信證〕

○文殊師利言く、居士此の室、何を以て空にして侍者なきや。維摩詰曰く、諸佛國土亦復皆空な

り。又問ふ、何を以て空と爲す。答へて曰く、空を以て空なり。又問ふ、空何を用つて空なる。答へて曰く、無分別空を以ての故に空なり。又問ふ、空分別すべきや。答へて曰く、分別亦空なり。又問ふ、空當に何に於て求むべきや。答へて曰く、當に六十二見の中に於て求むべし。又問ふ、六十二見、當に何に於て求むべきや。答へて曰く、當に諸佛解脱の中に於て求むべし。又問ふ、諸佛の解脱當に何に於て求むべきや。答へて曰く、當に一切衆生の心行中に於て求むべし。又、仁の問ふ所の何ぞ侍者なきとは。一切衆魔及び諸の外道皆吾が侍也。所以は何ん。衆魔は生死を樂ふ。菩薩は生死に於て捨てず。外道は諸見を樂ふ。菩薩は諸見に於て動かず。〔維摩經〕

○内空、外空、内外空、空性空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、無失空、本性空、諸法空、自相空、不可得空、無物空、自性空、無物性空。〔智度論〕

○我及び涅槃、此二皆空なり。何を以て空と爲す。但だに名字を以ての故に空なり。此の如きの二法は決定の性無し。是の平等を得れば餘病有ることなし。唯空病あるのみ。空病も亦空なり。〔維摩經〕

不二

○是の如く諸の菩薩、各々說き已つて文殊師利に問ふ、何等か是れ菩薩不二法門に入るなる。文殊師利曰く、我意の如きは一切の法に於て、言も無く說も無し。示も無く識も無し、諸の問答を離る。是を不二法門に入ると爲す。是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ。我等各自ら說き已んぬ。仁者當に說くべし。何等をか是れ菩薩不二法門に入るとす。時に維摩詰默然として言無し。文殊師利歎じて曰く善哉善哉。乃至文字言語あること無し。是れ眞に不二法門に入るなり。是の入不二法門品を說くの時、此衆中に於て五千の菩薩、皆不二法門に入りて無生法忍を得たりき。〔維摩經〕

要門（諸行往生）

○又正念といふにつきて二あり。一には定心の行人の正念。二には散心の行人の正念あるべし。この二の正念は他力のなかの自力の正念なり。定散の善は諸行往生のことばにおさまるなり。

〔末燈鈔〕

○定散之專心とは罪福を信ずる心を以て本願力を願求す。〔敎行信證〕

○釋迦は要門ひらきつゝ、定散諸機をこしらへて、正雜二行方便し、ひとへに專修をすゝめしむ助正ならべて修するをば、すなはち雜修となづけたり、一心をえざるひとなれば、佛恩報ずるこゝろなし、佛號むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雜修となづけてぞ、千中無一ときらはるゝ。〔高祖和讃〕

○此の願の行信に依りて淨土の要門方便權假を顯開す。此の要門より正助雜の三行を出せり。此の正助の中に就て、專修あり、雜修あり。機に就て二種あり。一者定機、二者散機也。又二種の三心あり。亦二種の往生あり。二種の三心とは一者定の三心、二者散の三心なり。定散心と者即ち自利各別の心也。二種の往生と者、一者即往生、二者便往生、便往生とは即是胎生邊地雙樹林下往生也……然るを常沒の凡愚、定心修め難し、息慮凝心の故に、散心行じ難し、廢惡修善の故に。〔教行信證〕

所依の文言索引

(一)

極樂……一
易往無人……一
不可說……二
信心決定の時……六
實相爲物……九
憍慢の衆生……一〇
金剛の眞心……一一
名號……一三
相入相融(消えてしまう)……一三
信行一致……一三
人師……一四
虛妄……一五
還相廻向……一五
詮鑒と信心……一五
體と用……一八
信心の人(正定聚、一生補處)……一九
惡人正機……二一
藥あり毒を好めにあらず……二三
煩惱卽菩提……二七
信心の力……二七
自然法爾……二八
正義……二九
學匠沙汰(會解講釋)……二九
無碍の一道……三一
二河白道……三一
觀念の遊戲……三四

精　進……三五
報謝の念佛……三五
善知識（明師）の仰せ……三八
勝他利養名聞（立身出世）……三九
地切り場切り……四一
（二）
浮世の凡夫……四一
諸惡莫作……四二
斷常の二見……四三
增減の二見……四九
有無の二見……五〇
立枯（小乘）……五三
應病與藥、以毒制毒……五三
肯定否定……五四
招喚の勅命……五五
無明煩惱……五五
眞宗の正意……五六
身口意の三業……五七
信　謗（大衆の聲）……五八
（三）
過現當（三世）……六〇
唯佛與佛……六一
王法爲本……六一
正　法……六一
現世利益……六三
不生不滅……六四
御聖敎……六四
如來廻向の信心……六五
意により語によらず……六五
野狐禪……六六
義なきを義とす……六六
他力本願……六八
欲生願求……六八
三業惑亂……六八
南無阿彌陀佛……六九
生死卽涅槃……六九
他力のなかの自力……七〇
涅　槃……七〇
親鸞一人がためなり……七一
聖德太子……七一
卅五願（非男非女）……七二
（四）
輪廻流轉……七三
自力のはからひ（妄分別）……七三
拔苦與樂……七四
菩薩行……七四
不斷煩惱得涅槃……七七
（五）
地獄一定……七七
光號因緣……七七
一心一念……七八
一向專修……七九
信心歡喜……八〇
光　明……八一
虛　空……八一
不　二……八二
要　門（諸行往生）……八三

井尻　進著

雑思（なんし）

佛さまがあると言つても外道なら、ないと言つても外道だといはれる佛教のやうである。神さまを褒めてもコトアゲなら、くさしてもコトアゲだと敎へられる神道のやうである。

そこに立つても居てもゐどころのない凡夫を發見する者として、「神も佛もあるものか」などとは言はれなくならざるを得ない。

こゝに、よんどころなく道を師に求め、二進も三進も動きのとれない身をもつて、しかも、そのまゝ大慈大悲に導き入れられる門が若しも開かれるとするならば、それこそ、之にすぎた幸福はないかも知れない。

ところが、その難思に陷るものゝ幸福を味はゝれる前に、本書によつて、先づ筆者とゝもに一應その惱みにうなされて見られて如何……

村上春岳畫伯裝幀　裂地上製天金

四六版三一七頁　定價金壹圓八拾錢

（送料金拾貳錢）

大阪市東區本町四丁目　津村別院内

大乘社

電話本町六〇九番　振替大阪六九五六七番

342
1265

昭和十二年二月五日印刷
昭和十二年二月七日發行

俗諦極樂問答　天の羽衣

定價貳圓參拾錢

著者　井尻　進

發行者　大阪市東區本町四丁目　津村別院内　井尻　進

發行所　大阪市東區本町四丁目　津村別院内　大乘社

印刷者　京都市下京區猪熊通梅小路上ル　堤　淨祐

印刷所　京都市下京區猪熊通梅小路上ル　文化時報社印刷部

版權所有

終